
星光の魔王-シュテル・ザ・エルケーニヒ-

えーさく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星光の魔王・シュテル・ザ・エルケーニヒ -

【Nコード】

N4448Z

【作者名】

えーさく

【あらすじ】

アホの子戦記で転生したヲタクの行き先がスパロボではなくリリカルなのは、しかも高町なのはに転生していたらという設定で描くリリカルマジカルもとい『リリカルマジウスなのは』、始まります。

ブローグ 高町なのは、始めました。(前書き)

導入というかテンプレですね。

ブログ 高町なのは、始めました。

皆様初めまして、こんにちは、こんばんは、おはようございます。

高町なのは、3歳です。

いきなりのご挨拶に、3歳児ならぬ流暢で小難しい言い回しをしています、これが私の素です。

何故私がこのような行動をとったのか、簡潔に述べてしまえば、私が転生者であるからです。転生の詳しい経緯は、アホの子戦記をよろしく！

すみません。おかしい電波を受信しました。ちなみに私はヒーロー戦記からのファンです。

話が逸れてしまいましたね。

とにかく、つい今し方、私は私が転生者である事を思い出したのです。

ですがまさかりリカルマジカルの世界で、しかも主人公の高町なのはに私になってしまうとは夢の端にも思いはしませんでした。

閣下、予想外にも程があります。

しかし驚いている場合ではありません。

このまま行けば、5年後、私はリリカルマジカルな戦いに身を投じなければなりません。

正直、自信はありません。ボディ的に言えば恵まれているのでしょ
う。しかし精神的には平和大国日本在住の自宅警備員。

こどもなりの怖いもの知らずに見え、正義感もあつた高町なのはならつゆ知らず。私のような小心者では万に一つも戦う心はないでしょう。リリカルマジカルは見ているから良いのであつて、実際にやれと言われてやりたいとは思いません。

魔法には憧れますが、私は平穩無事に2度目の人生を謳歌したいのです。それが私に出来る、この高町なのはへの贖罪なのでしょうから

II

1年が経ちました。

私はやはり高町なのではなく、正しく高町なのはなのだと、この1年間で思いました。

この1年。私は元来のラノベ好きから発展し、良く本を読むようになりました。しかし読むのは魔法ファンタジーな物ばかり、父様や母様におねだりして、魔装機神や第 次シリーズを買って貰ったり

しながら、スケッチブックにはわけわかめな発想や設定、理論ばかりを書いて、さらには電子機械系の本を読んだりと、ロボットヲタクで物静かな子となっていきました。

本を読み、電子機械系の参考書を読み、理解する為、必然と理数系と文系は得意になったりはしたのですが、運動はからつきしダメでした。走れば転ぶ、ボールで遊べばボールに遊ばれる始末、これ程までに運動神経がダメだったとは思いませんでした。特に私の場合は男の大人の運動神経感覚がまだ抜けきらない為に余計ダメなのではないかと思つてしまいます。

運動出来なら、出来ないなりにやるしかない、私は方向転換。腕立てや腹筋背筋スクワットを敢行し、少しでも太らないようにします。喫茶翠屋は乙女の敵。その経営家である高町家は、元男の私でも気になるくらい3時のおやつが豪華絢爛です。代わりに乙女にとっては力ロリーとの戦いという聖戦を強いられますが……。よく高町なのは太りませんでしたね。

私でさえ2ヶ月+1キロに抑えるのがやっとだというのが、

4歳の一年間は、とりあえず魔法的な物を遊びながら調べ、カロリーとの大合戦の日々でした。

[illegible]

5歳になりました。

この年は幼少期のワーストスリーの年でしょう。

幼稚園から帰ってきたら、いつも迎えにきてくれるはずの母様は居ず、代わりに姉様が私を出迎えてくれました。しかしその表情には覇気がなかった。

家に着いて、挨拶をしてもシンツとして、姉様の返事以外には聞こえませんでした。

母様は店の方なのでしょうか？

しかし、昨日から父様が出掛けるということで、昨日今日明日の3日間は店を休業にすると一昨日の夜に聞きましたから、母様が居ないのは買物にでも行ったのでしょうか。でもそれならば姉様に覇気がないのが不自然に思えます。私は自慢じゃありませんが、姉様より中身年齢は大人です。自宅警備員でも人の顔から様子を読み取るくらいは出来ます。

そして覇気のない姉様の顔は、まるで何かを我慢しているかのようでした。

私は姉様には事情を聞かずに、自分の部屋へと向かいました。

私の部屋は、間取りこそ高町なのはのへやと同じなのでしょうが、一言で言い表せば、女の子らしくはない部屋でしょう。

ブラモが飾っており、部屋のポスターもスパロボですから。

机に向き、スケッチブックを開き、また新しい設定や絵を書いては、息抜きに プレイしたりして過ごしました。

そして夜になると兄様の気配がし、そして母様の気配も家に帰ってきました。しかし、2階にまで漂う言い知れぬ感覚に、私は1階の様子を見に行こうとは思いませんでした。

気づいたら私はそのまま寝ていて、翌日となっていました。誰かに起こされた感覚はなかった為、いよいよおかしいと思い、1階に降りました。しかし1階はものけのから。

テーブルの上にはラップ掛けされた食事と、しばらく忙しくなると
という旨の書かれた母様の置き手紙。

おそらくよっぽど忙しかったのだらう。朝食はあっても、お弁当がなかった。

とりあえず朝食をレンジで温めつつ、冷蔵庫の中身から適当に食材をチヨイス。

この身体になつてから料理はしていませんが、2年のブランクなど
なんのその。自宅警備員は伊達や酔狂ではありません。

フライパンに油を引き、出汁と刻んだニラを入れた溶き卵を投入。
出汁巻き卵にします。

朝食をつまみながらお弁当を作る。少し行儀が悪いですが、御勘弁を、幼稚園の始まりは遅くとも、私の5歳児の身体ではこうでもない
と間に合わないのです。ちなみにキッチン周りには私の足場とする為、イスがズラリと並んでいます。

そして1人で迎えのバスに乗り、幼稚園から帰ってくれば姉様の迎

え、家に到着後は部屋へ、そして寝倒しての日々が一週間続いたあと、いよいよ色々とも私も気になってきてしまい、姉様にそれとなく尋ねてみたのですが、はぐらかされてしまいました。

しかし、最近の高町家はおかしい。家で母様を見かけることはなくとも、朝食やお弁当に夕食があり、置き手紙もある分、家には帰ってきている様子。

姉様は毎日私を出迎えてくれますが、日に日に顔が悪くなっている様子。

そして一番は兄様でしょう。日に日にピリピリとイラついているようで、道場の方から怖いと思える程の気迫のある雄叫びが聞こえることもザラです。

そして父様。この一週間、まったく姿も気配も感じません。ここまできると、私も嫌な予感が頭を過ぎります。

私の父様、高町士郎。

以前は世界を旅し、重役のボディガードなどを務めていたというトラハの設定は私も知っています。そしてSPの仕事中に殉職したことも。

ですがトラハでは父様は高町なのは顔を見ないまま逝ってしまっただ人。時期が合いません。

ですが家族第一我が家の大黒柱の父様が一週間も帰らないのはそれこそ一大事を疑います。

ですが、母様も姉様も兄様も、私には話してくれません。

ガードの甘い姉様ですら話してくれないのならば、兄様と母様に訊いたとて無駄でしょう。子どもの私には座して待つしかないのが、辛い。

少し飛んで2ヶ月が経ちます。

この頃は高町家空中分解半歩手前とも言えるかもしれない時期でした。

2ヶ月経とうとも、父様は帰って来ず。冷静な私もいよいよ心が不安定になっていき、家に居ることを少なくするようになりました。それはただ単純に家に居たくないという私の思い。

未だに話しはされず、家族は疲れた表情を浮かべ、兄様は余計にピリピリとし、はつきり言つて最悪な雰囲気なのです。

もう六歳を迎え、来月は幼稚園も卒業。そして小学校に上がる身としてはとてつもなく不安定であり、そして嫌だった。

私に話してくれないのは、私が子どもだからではなく、私が本物の高町なのではない、高町なのはの立ち位置、存在を奪った赤の他人だから、家族ではないからなのでしょうか……。

ポタポタと流れ落ちる雫。

何故私は泣くのでしょうか。わかっていたことです。所詮私は高町な

のではない。別のナニカ。

本来の高町なのはには似ても似つかない私は、高町家の一員として暮らす資格など……。

気づけば足は近所の公園に向き、私はブランコに座っていました。

今更砂場遊びをする年齢でもありませんし。私はブランコの方が好きです。

ブランコをかなりの高さまで漕いで高さと速さに要らぬ思考が頭を過ぎる。

ここで手を離せば、家族は心配してくれるだろうか？

父様に逢えるだろうか？

あるいは頭を強かに打てば自分は死に、本来の高町なのはが帰ってくるのでは？

そんな考えが浮かび上がる程、この時の私は随分と追い詰められていたのでしょうか。

もうどちらかに一回転しそうな角度までブランコは上がり下がりを繰り返している。

でもチキンハートの私にはそんな勇氣もなく、結局はブランコから降りて、人の居なくなつた公園の滑り台の上で最近開いてないスケッチブックを広げました。

中には様々な魔装機や魔装機神のラフ画や設定。魔装機神のプラナやエーテルに関する私なりの考察などなど。

いつか役に経つのではと書いていたスケッチブック。それをパラパラと捲り、とあるページでそれは止まる。

そこには私が理想とする魔法少女の姿。

杖を片手に脅威と苦難に立ち向かう不屈の心を持った少女、高町なのはのスケッチ。

無印の9歳、コミックの15歳、stsの18歳、さらに23歳と25歳。

私の覚えている限りの高町なのはが描かれていた。

私の、決して届かない目標にして理想の高町なのは。

高町なのはが一番星ならば、私は肉眼では見えないちっぽけな星でしかないのだろう。

私には愛も力もない。

リリカルマジカルでもとらいあんぐるハートでもない、『理』を真似ている私のような存在は所詮

暗がりゆく空を見上げれば、そこには輝く星光。一番星。

視界が歪む。

目に力を込めても歪みは強くなっていく。

こんなこと程度でないではいけないというのに、高町なのはが涙を流すのは誰かの為なのに

ポタポタと、スケッチブックに雫が落ちる。流れ出した涙は堤防を決壊させ、鉄砲水となり吹き出す。

「…わ、たし…は、なぜ、たか…ま、ち…なの、は、につ」

辛い。悲しい。怖い。寂しい。

色々な感情がぐちゃぐちゃになって吹き出す。もうせき止めは出来なかった。

「だ、れか、たすけ…て……」

2年間。たったそれだけでも心を病むには十分過ぎた。とくに自分が高町なのはとして産まれたから余計に。

高町なのはの幸せを奪ってしまった。

高町なのはの居場所を奪ってしまった。

高町なのはの存在を奪ってしまった。

いずれは戦いに身を置かねばならない運命。

普通の凡人には過酷過ぎる運命だった。

特に高町なのはが歩むだろう16年を大まかに知るだけに余計。

『Please do not cry. (泣かないで下さい)』

「うっぐすっ…………えう？」

ふと耳に聞こえた電子音調の英語。

「だ、だれ、です、か…………」

『Please do not cry. I will also become sad if you are crying. (泣かないで下さい。貴女が泣いていると、私も悲しくなります)』

顔を上げて、誰も、どこにも、なにも居ない。

「そ、ら…みみ？」

『It is not a mishearing. I am in a you side perfectly. (空耳ではあ

りませんよ。私は貴女の傍に、ちゃんと居ます」

「わた、し、の…そば？」

『Yes. Therefore, please do not cry. My meister who loves (はい。だから泣かないで下さい。愛するマイ・マイスター)』

また、涙が溢れてきた。

でもそれは……

『Meister? Did it carry out if you please? In something, I am impoliteness by no means. (マイスター? どうかしましたか? まさか私が何か失礼を)』

「いい、え……いいえ、違い…ます」

嬉しかったんだ。

独りぼつちだと思い込んでた自分に、傍に居てくれた存在が居るのを。

「あなた……なのですね？」

スケッチブックに語りかける。

それは奇跡か、あるいは高町なのはである自分が書いた物だからなのか

『Yes・That's right・My meister
(はい。その通りです。私のマイスター)』

スケッチブックから聞こえる電子音は、とても温かに包んでくれるような声だった。

誰も居ない。私達しか居ない公園で、私は声も抑えずに、泣き散らした。

最初で最後にするから、今は自分の為に泣き、そして産まれてくれたことに感謝を込めて、泣いた。

そしてまた1ヶ月。腕に包帯を巻いて申し訳なさそうな顔をする父様に、私は素直に「お帰りなさい」と言っ
て抱きついた。

少し苦悶の声が聞こえましたが無視です。3ヶ月も心配をかけた罰なのですから。

第1話 タイムリミットまで、あと (前書き)

連投です。

第1話 タイムリミットまで、あと

side：高町なのは

あの日の出会いから3年が経ち、私は私立聖祥大附属小学校3年生として過ごしています。

あの日以来、私と共にある自称アリスは、簡単に言えば、私の著書した魔導書で、私の使い魔のような存在であるらしいのです。

まだシステムの未完成のアリスは、その活動には私からの魔力供給を受けて活動しているそうです。

夜天の書よろしく自立飛行とかも出来ませんが、私はアリスのお陰で大分救われました。

父様は、あの一件以来、長期間、家から居なくなることともなくなりました。あってもちゃんと、2日3日で帰ってきてくれます。

未だに何をどうしてあんな怪我をしていたのかはわかりませんが、3ヶ月という期間を考えれば、幾つかの予想を推論出来ますが、所詮推論。気にしないことにしました。

そして私は私立聖祥大附属小学校に入学を果たし、初めての友人を得ました。

「あ、おはようなのは」

「おはようなのはちゃん！」

バスに乗り込むと、その初めての友人であるすずかとアリサが手招きしてるのに気付き隣りに座りました。

「おはようございます。すずか、アリサ」

「前から時々思ってるけど、なーんか固いわよね、あんたは」

と、アリサが口をとがらせる。

「そうは言われましても、これが私ですから。今更変えようもありません」

中身が一応大人であるからにして、高町なのはのように子どもを私に出来るわけもなく、少々演じているような部分も無きにしも非ずですが、これが『私』なのです。

いつも通りに登校し、いつも通りに授業を受け、いつも通りの昼を迎える。

今日もそうなると思っていました。ですが

昼休み、学校の屋上。

いつもなら楽しいはずの昼食。ですが今日は色を失い、いつもとはまったく異なる昼食です。

昼食前の4時限目の授業は将来の夢について

とうとう、来てしまったのです。運命のタイムリミットが

今日は4月22日。もし劇場版コミックのようにならば4月26日が運命の日であるならば、あと4日。不吉過ぎるのにも程があります。

「で、なのはちゃんは？」

と、すずかに尋ねられました。恐らくは将来の夢についてでしょう。

「…私ですか？」

頷く2人に、どうやら心中はさらけ出していないと安堵しつつ、考えてみます。

「翠屋を継ぐのもいいですが」

私はバックからA4サイズのスケッチブックを取り出す。

「イラストレーターやアニメーターというのも、道筋のひとつかもしれないですね」

叶わない夢　　なのかも、知れませんが。

「なるほど、あんた絵、得意だもんね」

「なのはちゃんならきつと凄い有名になれるよ！」

「ありがとうございます。すずか」

スケッチブックに何が書かれているのか若干知っている2人は納得してくれましたようです。

放課後。2人は塾の為、校門でお別れです。

私は塾に行くよりもゲームとか新しい設定を考えたりする時間が欲しかった上、今のところ全筆記テストオール100点を独走中の為、塾には通っていません。

帰り際、人気の少ない方に歩いていたら、海岸線まで来てしまいました。

人の気配がなくなった途端、進級してから良く起こるようになった発作に胸が苦しくなる。

「くっ、はっ、うっ、はっ」

服を握り締め、苦しさを耐える。

タイムリミットを迎えるプレッシャーによる発作。

戦うことへの恐怖が、私の心を蝕んでいた。

『マイスター
Meister』

「アリ、ス……」

スケッチブックを胸の中に抱き締める。

私の本当の意味での味方は、彼女だけしか居ない。

アリスは私が記述した物すべてを覚えている。言わば辞書・ライブラリーー。

だから端々にも、これから起こること、私の正体も知っている。

高町なのはでなく、『私』自身の唯一の味方。愛おしい、私のファミリア。もうひとりのわたし。

「ア、リス……わた、し……」

『Please cry and breathe out now.
It muffles, although it is awkward. (今は泣いて、吐き出して下さい。拙いですが、消音をしておきます)』

「うつ、あ、つつ、うあああああああー……っ
！……！！」

私には勿体無さ過ぎるファミリア。

この子のお陰で、私は泣く事が出来る。私はやっぱり弱い、ちつぽけな星でしか 否、スペースデブリの星屑でしかない。

「はっ……はっ………」

『Could it settle down? Meister
(落ち着けましたか？マイスター)』

「……はい。一応は……」

涙を袖で拭い。幾分か楽になれた心持ちで、私は帰路に着きました。ですが、この苦しみでさえ、まだ序の口でもない程軽い物だと、この時の私は知る由もありませんでした。

第1話 タイムリミットまで、あと (後書き)

ここのなのは見た目も性格も喋り方がマテ子の星光ことセイことシュテルですが、ヲタク成分と大人頭脳の為、思考がかなりまわりまくり超賢く見えますが、一般人だった故に、かなり臆病で精神的強さに、本家なのはと銀河中心核とミトコンドリア並みの差があります。

第2話 星の光の生誕・Birth of a stellar light

side：高町なのは

「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……」

今日は人生最悪の日だと言えます。

4月26日。

とうとうこの日がやって来ました。

少年が怪異と戦う夢も見ました。

十中八九、あれがユーノとジュエルシードの暴走体。

夢だというのに言い知れぬ迫力と命のやり取りに、私は夜中に目を覚まし、それ以後寝れずに翌朝を迎えました。

その所為か、頭は痛い。胃はキリキリする。時々眩暈もする。

正直、コンディションは最悪と言っても過言ではありません。

「大丈夫？なのはちゃん」

「…ええ、軽い寝不足ですので、ご心配なく」

「また夜中までゲームでもしてたんでしょ？あんた普段生真面目なのにそういうことだけは不良よねえ」

「ゲームとアニメは私の生き甲斐ですから…」

以前素で夜更かしし、今に似た状況が何回かあるので、すずかとアリサには怪しまれずに済んではいますが、アリサの胸に抱かれるフレット、その首にある赤い宝石を、私は直視出来ません。

その後、フレットことユーノを病院に預け、すずかとアリサは塾へ、私は古本屋で新しいラノベと漫画を数冊買い。また何時もの海岸線に居ました。

「今夜……なのですね…」

『マイスター
Meister』

「…大丈夫ですよ、アリス。私には……『私』には貴女も居るのですから……」

そう、高町なのははユーノとレイジングハートが味方であった。

でも私にはそこにアリスという存在が、私の味方が居る。

それだけで心強い。それだけで、今まで心が折れずにいられたのだから

[illegible]

夜。

すずかやアリサと、ユーノの引き取り先について相談していたところ、とうとうやって来てしまった。

《誰か》

マイスター
Meister

「ええ、わかっています」

スケッチブックをキュッと抱き締め、アリスから勇気を貰う。

カバンにスケッチブックを入れ、気配を殺し、外に出て、自転車で病院へ。

自転車であるからでしょうか、私が病院に着いた時丁度、フェレットとユートが窓から飛び出す瞬間でした。

私はペダルを踏み込み、ロケットスタート。運動が出来ない私です

が、自転車の扱いとスピードにはちょっとした自信があります。

窓から飛び出したユーノを横からかつさりながら一目散に走り抜けます。後ろから破碎音が聞こえましたが、無視です無視。

「あ、あなた、は……」

「喋らない方が身の為ですよ。舌を噛みます」

私は自転車のギアと脚のギアを上げ、住宅地をひたすら突っ切る。

戦うにしろ何をするにしろ、この辺りでは被害が大きくなる。

「っ！後ろ！！」

「くっ！」

自転車を横に倒し、片足を地面に着いてのドリフトをしながら十字路を強引に曲がり、目指すは人口が少ない海岸線。

「……はっ……はっ……はっ……はっ……」

後ろから狙われる恐怖とプレッシャー。

狩られる側の恐怖。

そしてジュエルシードの暴走体ならば非殺傷設定なんて甘っころい機能なんて搭載していないでしょう。

正に命のやり取りに、私の恐怖のボルテージは何時の間にかMAXをオーバーブレイク。

勝手に溢れる涙を零しながらやっとの思いで海岸線へ到着。

浜に通じる階段をそのまま自転車ごと飛び降りるものの、着地の瞬間砂にタイヤを取られ、派手にズッコケてしまう。下が砂で助かりましたね。

「ケホッ！ケホッ！こ、ここ、まで、くれば…」

カクカクと震える脚を叱咤しながら立ち上がる。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

「ええ、あなたこそ、平気でしたか？」

「は、はい。僕の方は、大丈夫です」

とりあえずは、第一関門の戦闘フィールドの移動は成功ですね。

住宅地でドンパチやるよりは周りを気にしなくて済みますし、視界も開けていますし。

「なにが起きてるのかよくわかりませんが、私はどうすればいいんでしょうか？」

「えっと、あの、それは……」

口ごもるユーノ。

言うなら早くした方がよろしいですよ。

「もう、追いついてきましたか……」

空を見れば、夜空に小さく蠢く影。遠目ですが気持ち悪い不定形生物ですね。

「っ、ごめんなさい！でも今の僕には貴女にしか頼れる人が居ないんです」

本当なら管理局に任せていても良いはずの事を、発掘者だからと先行調査な来る程の責任感。

好感は持てますが、もう少しちゃんとした準備というものをして来

の方が良いと思う私は悪くはないはずです。

「これを　手に取って下さい」

ユーノが口でくわえる赤い宝石。

レイジングハート

レイジングハートを見た瞬間。心臓が震え、胸が苦しくなった。

今更、もう、後戻りは出来ない。

私は高町なのは

魔法少女として戦う宿命の星の下に産まれた存在なのだから……。

レイジングハートを受け取る。

煌めく宝石は、星光は今、私の手に渡った。

私は紡ぐ。

其れは聖約

其れは誓願

其れは不屈の力を手にする為の聖句

「我、使命を受けし者成り」

宝石が光りを放ち、私の足下に幾何学の円形魔法陣 ミッドチル
ダ式魔法陣を展開する。その色は闇を照らす桜色。

「契約のもと、その力を解き放て」

宝石と呼応する胸の鼓動。躍動するのは、現実では手に入る事は無い。御伽噺の中だから許される超常のチカラ。

「風は空に 星は天に そして不屈の心はこの胸に この手に魔導
を レイジングハート、セットアップ！」

『Stand by Ready・Setup・』

桜色の光りが天に解き放たれ、光柱を作り出す。

『Welcome・New User・』はじめまして、新たな
ユーザーさん！』

「初めまして、私は高町なのはと申します」

『I am the Raging Heart. I need your help well henceforth. (私はレイジングハート。以後よろしくお願いします)』

「ええ、こちらこそ。それで、私は何をすれば良いでしょうか？」

『Your magic love qualifies you to use me. May I select the optimum configuration for the Barrier Jacket and the Device? (あなたに魔法素質を確認しました。デバイス・防護服ともに、最適な形状を自動選択しますが、よろしいですか?)』

「デバイスはお任せます。服については私のイメージをトレースして構成して下さい」

『It understood. An image, trace e start. (了解しました。イメージ、トレース開始)』

光りが強くなり、文字の書かれた光りの帯が私を包む。

『Stand by Ready.』

宝石だったレイジングハートにパーツが合体し、魔法の杖となる。

それを左手で掴むと、服が光りとなって弾ける。

『Barrier Jacket setup.』

上半身が黒いインナーに包み込まれる。

下半身には黒いハーフズボンが形成される。

インナーの上に白地に黒の縁取りのコルセットと金色の胸甲が形成され、胸甲の上部には赤い宝石を付けた金色のパーツが付き、そのパーツを羽のように左右に広げる。

白地に青い縁取りのオーバーコートジャケットが形成され、袖口には青い腕甲が形成され、上下に別れていたパーツをボルトで固定される。そして両肩にも青いショルダーアーマーが形成される。

下半身はズボンの上に黒いベルトが通され、前開きの白いアウトスカートが形成される。

金色の脛当てが形成され、圧底の黒いブーツが形成される。

レイジングハートをバトンのように頭上で振り回し、利き手の左手に保持し、振り下ろす。

光りの柱が消え、地上に降り立つ。

『How much do you know about magic? (魔法についての知識は?)』

「無きに等しきと思って下さい。ですが説明を受けている暇もないようです」

暴走体が浜辺に降り立つ。

いきなり襲って来ないのは、先ほど私のセッアップした光りの所為でしょうか？

「レイジングハート、私に今出来ること、使える魔法をステータス形式で表示してください。それと、敵の判る範囲でのデータも下さい。出来ますか？」

『Comprehension・Various status is displayed.（了解。各種ステータスを表示します）』

空中に投影される複数のモニター。

敵はジュエルシールドの暴走体。魔力ランク推定A A。

高町なのは、つまり私。

魔力ランクA 空戦適性C 陸戦適性D + 総合ランク推定C +

使用可能魔法

シュートバレット

デイベインシューター
パイロシューター
クロスファイアシュート
チェインバインド
デイベインバスター（2発限定。3発目は不発の可能性大）
プロテクション

ほとほと自分の才能無しには涙すら流れず、渴いた笑いも出ませんよ。A'sで高町なのはがA A Aランク。この歴然の差はなんなんですか！？

……ですが、チェインバインドとクロスクロスファイアシュートが使えるのは重畳ですね。この時期の高町なのはに出来ない戦法も取れますし。それに私にはアリスも居てくれる。私は退くわけにもいきません。

しかしパイロシューターとなれば、私に魔力変換資質があるのでしょうか？

なのにブラストファイヤーが無いのは単に私の実力不足なのでしょうか？

考えていても仕方ありませんね。

『G a a a a ! ! !』

「くっ」

第2話 星の光の生誕 - Birth of a stellar light

今の主人公なのは、実力的にはs t s開始時のフォワード陣よりも弱い実力でリミット付きのなのはに挑むような感じで暴走体と戦うような物だと、頭の片隅に置いておいてくださいな。

英語があっているかどうかは激しく微妙なのであまり気にしないでください。

第3話 更なる絶望。しかし星光の輝きは力強く（前書き）

レイハさんは劇場版モデルです。

なのはのバリアジャケットは、簡単に言えば上半身は劇場版に両肩にショルダーアーマーを追加。下半身がstsのアウトスカートというイメージで充分かと

第3話 更なる絶望。しかし星光の輝きは力強く

Side: 高町なのは

『G a a a a a ! ! !』

「くっ！」

飛び込んでくる暴走体を数回のバックステップで回避する。

砂地に脚を取られますが、間一髪で避けられました。

粉塵が舞う地点から目を離さないように努めながら、距離を開けます。

転びそうになりながらも、躓きそうになっても、気合いで脚を動かします。

大体10m離れた所で脚を止め、レイジングハートを暴走体に構える。

『G a a a a a ! ! ! ! !』

暴走体が触手を伸ばして襲ってくる。その数は4本！

「デイベインシューター！」

『Divine shooter』

今形成出来たシューターは3発。

それを放ち、3本の触手を弾く。

『Protection』

「くっ！」

残った一本はバリアで受ける。

ピキピキピキ

受け止めたバリアが不吉な音を立ててひび割れ始める。

「っ、やはり私では」

『Front cautions!（前方注意!）』

「なっ!？」

レイジングハートの警告。暴走体が触手を押し当てながら私に突っ込んで来たのだ。

G
a
a
a
a
-
-
-
!
!

ぶつかりあうバリアと暴走体。だが亀裂の入っていたバリアは易々と砕け散り、暴走体の体当たりは私に直撃する。

「がふっ！！」

吹っ飛ばされた私は、防波堤にめり込む形で激突した。

「がっ、あぐっ、……こ、この、使徒のように器用な」

劇場版破のように、触手を突きながら体当たりなんて攻撃をして来た暴走体に毒づく。あれで目からビームなんて出した日には私は死んでいたでしょう。

Is it safe? (ご無事ですか?)

「な、
なんとか……」

めり込む身体を動かして抜き出る。

「くっ、がはっ！」

込み上げる吐き気を無視して、レイジングハートを構える。

しかし暴走体は襲っては来ない。

襲ってこないのならば好都合！

「レイジングハート、デイベインバスターを撃ちます」

『All right・Devine Buster, standby・Mode change・Cannon Mode.』

レイジングハートがその形を変える。白いバレルが追加され、トリガーユニットが展開される。

トリガーに指を掛け、カノンモードの砲口を暴走体に向ける。

『Shoot in Buster Mode.』『直射砲』形態で発射します！』

砲口にミッド式魔法陣が展開され、身体の奥底から湧き上がる力を腕を通して、すべてレイジングハートに！

『Immediate fire when target is locked.（ロックオンの瞬間にトリガーを）』

網膜に投影されているのか、眼に見える景色がロックオンディスプレイに変わる。

「っ、デイベインバスター！シュートッ！！」

脚に力を込め、トリガーを引く。

腹に響く重低音をあげて、桜色の砲撃は暴走体へと一直線に向かう。

この時私は勝利を確信しました。

高町なのはの代名詞、デイベインバスターに撃ち碎けぬものはないと。

ですがそれを放ったのが私だった。そして暴走体が私の恐怖を糧にでもしたのでしょうか。

デイベインバスターが直撃する瞬間、暴走体と眼が合い、そしてその赤い眼は厭たらしく歪めたのです。

直撃し、粉塵を巻き起こすデivainバスター。

『Front watch! Hostile object energy reaction increase! (前方警戒! 敵性体エネルギー反応増大!)』

レイジングハートの警告と同時に粉塵が吹き飛び、目の前が真っ白に染まる。

『Protection』

「きゃああああー!!!!」

展開したバリアごと吹き飛ばされ、再び防波堤にめり込む。

瞬間、バリアが弾け、大爆発を起こした。

「うつ、ああ、ああっ」

『Fooooo.....』

閃光が晴れ、震える眼差しで見つめる先。

ジュエルシードの暴走体は、不定形な形を捨て、確かな実体物として存在していた。

髪の毛のようになびく触手。

仮面の様な顔。

白いヒトのカラダ。

その胸に輝くジュエルシード。

その全体像は力を司る、最強の拒絶タイプの神の使い。

第14使徒、ゼルエル。その劇場版『破』の第10の使徒の姿に相違なかった。

「は、ははは、はははははははは」

めり込んだ防波堤から抜け出すこともせず、私は笑うしかなかった。

世界は……神は、そうまでして、私のことがそんなにも嫌いなのですか？

私という異物を、排除したいのですか？

暴走体が触手の一対を円柱状に束ねた。

詰みですね。

心が折れた私には、もはや抗う意志すら湧いてきません。所詮私は高町なのは成りえない

シュキンッと、空を裂くような音が聞こえた。

触手が射出された音。

これで、終わりですね

『Protection』

無駄ですよ、レイジングハート。

アレには私程度のバリアでは紙に等しいのですから。

バリアの弾ける音、防波堤のコンクリートが砕ける音、そして全身を襲う衝撃。

でも、痛みはありません。ハズレたのですか？

『Please do not give up.（諦めないでください）』

無理ですよ。私には……。

『I do not want to give up. (私は、諦めたくはありません)』

.....。

『I was able to meet the person using me at last. (私はやっと、私を使ってくれる人に出逢えました)』

レイジングハート.....。

『Let's offer all of me to you. I would like to become your power. (私のすべてを貴女に捧げましょう。私は、貴女の力になりたい)』

レイジングハート.....。

『It must not be discouraged. A master and you are not one person. (挫けてはなりません。マイスター、貴女は独りではありませんよ)』

背中のカバンから聞こえるレイジングハートとは別の電子音。

それはずっと私の味方で居てくれる、私のファミリア。もうひとりのわたし。

アリス……。

『being in a you side and keep i
ng the heart , although I can d
o nothing - - if - - it can do .)
私には何も出来ませんが、貴女の傍に居て、その心を守ることぐら
いなら出来ます(』

アリス

『Therefore , the Raging Heart .
Please become the power which
cuts a master's way . (だからレイジング
ハート。あなたはマイスターの道を切り開く力になってあげてくだ
さい)』

『I understand . I mean to from
the first . Are reliable . (わかりまし
た。もとよりそのつもりです。ご心配なく)』

レイジングハート

レイジングハートの石突を地面に着き、笑う膝で立ち上がる。

「レイジングハート、私に勇気を、恐怖を打ち砕く勇気を私に！」

『All right , My Master』

自分の脚で地に立ち、レイジングハートを左手に構える。

『Hover Feather』

後ろ腰辺りに桜色の一对の羽が生え、踝辺りにも小さな羽が生える。

これはいつたい？

『The magic for empty games was arranged in land battles. Movement on land becomes smooth now. (空戦用の魔法を陸戦用にアレンジしました。これで陸上で移動がスムーズになります)』

「ありがとうございます。レイジングハート」

ふわりと、少しだけ腰辺りに浮力を感じます。

踵も少し浮かんでいます。

Hover Feather

つまりホバー走法を可能とする魔法ですか。

改めてステータス画面を確認します。

ジュエルシード暴走体 推定ランクA A +

物理質量攻撃 触手（円柱）威力A A 射程推定A + 発動速度推定B +

砲撃 威力A A A - 射程推定B \ A A 発動速度A

高町なのは

魔力ランクA 空戦適性C 陸戦適性D +（ホバーフェザー発動中はA +） 総合ランク推定C +（ホバーフェザー発動中はB）

使用可能魔法

シュートバレット

デイベインシューター

パイロシューター

クロスファイアシュート

チェインバインド

デイベインバスター（2発限定。3発目は不発の可能性大）

プロテクション

ホバーフェザー

「さあ、2人とも、反撃の時間ですよ」

『Comprehension .

Please leave support .（了解。サポートはお任せください）』

『About the fortune of war , it

is
my
my
master . (二)武運を、
マイマイマスター

第3話 更なる絶望。しかし星光の輝きは力強く（後書き）

ジュエルシードの暴走体が思念体であるからこうしてみました。

デバイスの会話が難しい上に面倒で、さらに確実性なしと散々ですが、レイハさんとアリスはなのはの嫁なので頑張ります。

第4話 星光よ、使徒を撃て！

side：高町なのは

対峙する私とジュエルシードの暴走体。

戦闘力は別として、戦闘能力的にはATフィールドを張らないゼルエルそのままのようです。

捕食やATフィールドはイメージしていなかった為、余計なことを考えるのはもう止めにして、今は目の前のことだけを考えます。

戦力的には圧倒的に不利。

それでも『理性』と『作戦』ならば、高町なのはより私の方が上であるのは確かでしょう。

戦力不足でも、作戦次第ではそれを覆せる。

ティアナだってやってみせたんです。

10年後、出逢うかもしれない1人のガンナー。

彼女の気持ち、今なら私にはわかる。

彼女は周りが、私は高町なのはが、優秀過ぎて負い目を感じるその気持ち。

そんな彼女でも、立派に、1人で飛び立つ事が出来た。

なら、私にも同じようにはいかずとも

Google!!!

「目の前の敵ぐらいならば、**撃ち抜いてみせます!**」

「Enemy, energy reaction increase! Coming urgent evasion! (敵、エネルギー反応増大! 来ます、緊急回避!)」

「く」

身体が横に吹っ飛ぶ。

アウトスカートを掠め、暴走体の砲撃。

さすが空戦用の機動魔法。陸戦用にアレンジしたとは言っても、機動力はそれ程変わらないでしょう。横Gがハンパないです。ですがこの機動力で掻き回せば！

Warning! It continues the 3rd wave! (警告! 第2波、第3波、
続けて来ます!) ♪

「全力回避！機動マニューバーは任せます！クロスファイア展開！」

『Comprehension・Best evasion, Cross Fire deployment! (了解。全力回避、クロスファイア展開!)』

「くうつつ!!」

右から左に後ろに、景色が速流れ、視界の隅に黒い細い影。

視界がディスプレイに変わり、正しく周囲が見えるようになる。

自身の触手を次々に差し向ける暴走体。その数は30本。

レイジングハートとホバーフェザーによる高機動マニューバーによって、バリアジャケットに掠めながらも、直撃は0。

優秀ですね、レイジングハート。私には勿体無いデバイスです。

周囲に浮かぶスフィアは6つ。

「クロスファイア! シュートツ!!」

6発の魔力弾が暴走体に向けて放たれる。

4発は迎撃され、残り2発はあろうことが、暴走体が展開したバリアに弾かれる。

「バリアまで!？」

『Barrier generating of presumed A+ is checked. (推定A+のバリア発生を確認)』

「ならばバリアごと撃ち抜くまで! シュートツ!」

6つのスフィアが一つとなり、砲撃を放つ。

デイベインバスターは残り1発。

それ以外で威力を持つ攻撃は、クロスファイアシュートの砲撃バリエーションしか思いつきません。

「レイジングハート! カノンモード!」

『mode change. cannon mode.』

カノンモードのレイジングハートの柄を脇の下に通し、手はライフを支えるように添え、トリガーユニットを握る。

デイベインバスターの衝撃を子どもの私が抑えるのには、やはりライフル銃を保持するようにした方が効率が良いでしょう。それに高町なのはの握り方は、実際にやるとレイジングハートが反動で吹き

飛びそうで怖いんですよ。個人的に。

「デイベインバスター！シュートッ！！」

クロスファイアシュートに続くようにデイベインバスターを追撃に撃つ。

1発でダメならば2発一度に叩き込めば！

暴走体はクロスファイアシュートをバリアで防御。その直後を襲ったデイベインバスターが、バリアを貫くのを、私は確かに目にしました。

バリアを破り、暴走体に直撃する桜色の閃光。

爆発が起き、粉塵が視界を隠す。

「はぁ…はぁ…はぁ…はぁ…はぁ……」

荒んだ呼吸を整える。

デイベインバスターの直撃。これで片をつけられなければ、私の勝ち目は

「It is an energy reaction to the center of an explosion!（爆心地

にエネルギー反応！）』

「何ですって　！？」

粉塵が晴れ、そこには表層を焼きながら、太い一対の触手をジュエルシードを守るようにクロスさせた暴走体の姿。

「そ、そんな……」

今ので落とせなかった……。

もう、デイバインバスターは撃てないというのに……。

「ッ！ー！うおおおおー！ッ！ー！」

地を蹴り、私は一直線に暴走体へ跳ぶ。

「パイロシューターッ！！クロスファイアシュートッ！！」

『Pyro shooter and Cross Fire Shoot』

クロスファイアシュート6発とパイロシューター4発の計10発を

至近距離で撃つ。

ジュエルシールドには、まだ届かない！

「いい加減に　墜ちなさい！！」

カノンモードの砲口を触手に押し当て

「シュートバレット連射！」

『Shot Barrett automatic fire!』

カノンモードの先端から連射されるシュートバレット。しかし零距离射撃にも関わらず、触手は焼かれるだけでびくともしない。

「あああああーーーー！！！！！！」

込めるだけの魔力を込め続け、攻撃の手を緩めず撃ち続けました。
しかし

プシュン！

「レイジングハート！？」

『Overload・Compulsive cooling』

撃ちすぎた!？

廃熱の為に攻撃を中断せざる得ないレイジングハート。

その時、視界の片隅で動いた黒い影。

「がっ!!」

気づけば私は上空に打ち上げられていました。

空中では私は身動きも取れない。

真っ逆様に墜ちた私の目と暴走体の目が交差する。その身体には束ねて円柱になった触手

空中コンボ……

『Protection』

「っ、きゃああああ——!!」

またバリアごと吹っ飛ばされ、砂浜にうつ伏せになる私。

『Is it safe? Master(ご無事ですか? マスター)』

どうする!?!? どうする高町なのは!?!?

デイバインバスターは撃ち尽くし、次点高威力のクロスファイアシ
ユートの砲撃バージョンではバリアを破るには至れない!

他に私が出来ることは!?!?

逃げる?

そんなの論外です! 私が高町なのはとなるためにも、こんな所で退
くわけにはいかないのです!

誰かに援軍を?

ユーノは戦えないでしょう。

それにこうも長時間派手に戦い続けているのに人が来ないのは、ユ
ーノが結界を張っているからでしょう。

姿は見えませんが、ユーノがやられてしまっ=ジ・エンド。

バインドで拘束して集中砲火?

無駄でしょう。シュートバレットとはいえ零距离連続射撃に耐え抜いた体組織やクロスファイアシュートとディバインバスターでやつと破れるバリアの前では。

もつと、私に攻撃力のある魔法が使えれば

『Hover Feather, Output fall! Please master and concentrate! (ホバーフェザー、出力低下! マスター、集中してください!)』

「レイジングハート……」

詰み状態で諦めかけていた私。

そんな私とは反対に諦めずに戦い続けるレイジングハート。

その名の如く、不屈の心を宿すデバイス。

私のような者には分不相応な子。

十全にその性能を引き出してあげられない私をマスターと呼んでくれた子。

私には、レイジングハート、あなたの力を出し切れ

「……レイジングハート」

『What is it? Master（何でしょうか？マスター）』

「フルドライブを使います。もうそれしか手立てはありません」

『It is it why?（な、何故それを？）』

やはり、あなたは私には勿体無いデバイスです。

初対面の私を気遣う優しい心も持っているのですから。

フルドライブ

インテリジェントデバイスの最大出力モード。

しかし、リンカーコアが本格的に覚醒したばかりの私では負担も大きいでしょう。伏せていたか或いは使えないのか、レイジングハートの様子から見ればおそらくは前者なのでしょう。

ですがこの暴走体は、手加減して勝てる相手でもないのは本モデルの時点、そして暴走体の耐久性から一目瞭然です。

「生きるか死ぬかの瀬戸際に、躊躇いや出し惜しみは不要です！ですから、レイジングハート！」

『I understand. Surely prepared

ness of the master was received . (わかりました。マスターの覚悟は確かに受け取りました) 』

「ありがとうございます。 レイジングハート」

私はレイジングハートへの感謝の意を噛み締め、身体を立ち上げらせる。

「レイジングハート！その名の如く、不屈の力を私に！」

『All right limit release . Full Drive 』

カノンモードのレイジングハートの砲身フレームから一对の桜色の翼が生える。

フルドライブと同時に身体を襲う倦怠感。 ですが、それを上回る力の鼓動も確かに感じます。

「チェーンバインド！」

『Chain Bind 』

突き出した右手の先に展開されるミッド式魔法陣。

そこから飛び出す6本の桜色の鎖は一直線に暴走体へ。

バリアを展開されましたが、そのバリアごと雁字搦めにしてしまいます。

『Hover Feather, output full op
en!』

「やあああああー！ー！！」

地を蹴り、ホバーフェザーの推進力を得て、私は暴走体の懷へ突貫します。

「デイベインバスター！スタンバイ！」

『All right. Devine Buster, sta
nd by. Charge start.』

カノンモードの砲口に環状線型魔法陣が展開。砲口の先に桜色の閃光が集まっていく。

「うぐっ！」

急に苦しくなる胸を右手で抑える。

『Master！（マスター！）』

「私に構わず続けなさい！」

『…Comprehension．（…了解）』

今さら覚悟していたことです。

今は身体よりもアレを撃ち抜く力を

『It is 5 more seconds till the completion of charge！（チャージ完了まで後5秒！）』

「ホバーフェザーへの魔力供給を80％カット！少しでも良い、チャージにまわして下さい！」

『All right．80％ of magic supply cut．Count 4（オーライ。魔力供給80％カット。カウント4）』

速度がガクリと落ちましたが、今は速さよりも攻撃力を少しでも上げなければならぬ時。機動力の低下は何とかすれば良いだけです！

『An enemy part, bind break! A counterattack comes! Numbers are 3 and evasion! (敵一部、バインド・ブレイク! 反撃が来ます! 数は3、回避を!)』

「構いません!そのまま直進、最小半径で回避!」

襲い来る3本の触手を、東方弾幕よろしくグレイズで回避!

ジャケットとスカートが裂かれ、右腕を掠めましたが

被弾0。

「周囲に散る残留魔力もチャージにまわして下さい!」

『All right. Count 2 (オーライ。カウント2)』

強固なバリアと体組織を撃ち抜くには、高町なのはの最強魔法でなければならぬでしょう。

デイベインバスターすら2回しか撃てない私には、これを御せるかはわかりません。一か八かのただの博打ですが

『An enemy and bombardment come! (敵、砲撃が来ます!)』

「空へ!!」

地を蹴り、空へ跳ぶ。

ホバーフェザーに滞空能力があるかはわかりませんが、空へ跳躍した私達の足下を閃光が通り過ぎます。

『Completion of magic charge! (魔力チャージ完了!)』

「レイジングハート! 私を敵の眼前へ!」

『All right. My master! (オーライ。マイマスター!)』

再び襲い来る砲撃を、一瞬だけ解放された推力を得、夜空に輝く星光を背に宙返り、砲撃を回避。

砲撃の熱が直ぐ傍を通るのを感じつつ、再び推力を解放。

また新たにバインドを破壊した触手が反撃に放たれる。

バリアジャケットが裂かれ、左のショルダーアーマーが砕け、左頬を触手が掠め血が流れる。僅かに体勢を崩すも、その瞳に宿る闘志は決して砕けてはいない。

「レイジングハート……私を」

こんな私の為にその力を示してくれるレイジングハート。私の意思に応えてくれると信じている。

暴走体は目の前！

レイジングハートの砲口に展開する環状線型魔法陣が、トリガーユニットと柄にも展開される。

脅威を目前にして、出力が上がるのを魔法陣を通して感じました。

そうです、レイジングハート。だから私を

「私を、勝たせて下さいっ！！」

暴走体の頭上から一気に地面に降り立ち、衝撃の緩和も忘れ、両腕で構えたレイジングハートを暴走体の、体組織、ジュエルシールドを大事に守る触手に突き刺すように押し付ける！

『Starlight Breaker・Stand by Ready』

「これが私の全力全壊！！」

暴走体を縛るチェーンバインドが弾け、その仮面に光りが灯る。

ですが、私達の方が　速い！

「スターライトブレイカー！！デッド・エンド・シュートオオオオオッ！！！！！！」

トリガーを引く。

集めたすべての魔力が一点に集中し、巨大な星光となって解き放たれた。

「…私の　私達の、勝ちです」

トリガーを引く指を離し、そしてもう一度トリガーを引く。

「ブレイクッ、シューーーーーーッ！！！！！！」

ダメ押しの最後の一撃。

長い長い、されども20分にも満たない最初のジュエルシードとの攻防は、巨大な爆音と付随する衝撃波、そして桜色の巨大な十字架を天に掲げ、終わりを告げた。

第4話 星光よ、使徒を撃て！（後書き）

色々影響受けまくりですが、こんな形で終えてみました。

初回戦闘でフルドライブにスターライトブレイカー

本家なのはより無茶をしないとダメな我が家のなのは。あとがコワ
い……

第5話 実際のリリカルマジカルは命を全賭けするものです。by高町なのは

side:高町なのは

スターライトブレイカーの閃光が晴れると、宙に浮かぶジュエルシード。その数は1つではなく

「ふ、2つ……？」

『receipt number XX・XXI』

2つのジュエルシードをレイジングハートに納めた所で一気に脱力、膝について四つん這いになってしまいました。

ふ、2つなら、あんなべらぼつに強かったわけが理解出来ました

「っ、くっ、はぐっ、がはっ」

息苦しさで胸の痛みに目を瞑って耐えながら咳き込みます。

「ゲホッ、ゲホッゲホッ」

口から流れ落ちる液体。

唾液ではありませんね。鉄の味がすることから、血でも吐いたのでしょうか。

ある意味当然でしょう。

魔法初心者がいきなりの実戦でフルドライブで無理やりに魔力を底上げし、3発目のデイバインバスターならぬスターライトブレイカーまで使ってしまったのですから、これぐらいで済んだのが御の字でしょう。

四つん這いから胡座に変え、レイジングハートを抱えて身体を預ける。

しばらくは動けそうにもありませんね。ひどく疲れました。

side: ユーノ・スクライア

な、なんて子なんだろう……。

レイジングハートの形状から、あの女の子は砲撃型。

なのにあんなに接近して零距离で収束砲を直接撃ち込むなんて……。

魔力量自体は僕とそんなに変わらないのに、この管理外世界には魔法はないはずなのに、あんなに上手く戦えるなんて。

凄い、なんて言葉じゃ言い表せない。

でも

「あ、あの……怪我は」

「大丈夫です。痛みはありませんから」

そういう彼女だけれど、少なくとも傷も負ってる。

それに

「私が、高町なのはであることを証明する為に！」

その時の彼女の悲痛な顔。

言葉の意味はわからないけれど、彼女があんなに必死に戦えたのは、その言葉になにか意味があるのかもしれない。

「……………」

side：高町なのは

やっと呼吸が落ち着いたところで、レイジングハートを杖代わりに立ち上がろうとしますが、膝に殆ど力が入らずに、レイジングハートにもたれかかるように何とか立ち上がります。

興奮状態が落ち着いてきた所為か、頬や背中がヒリヒリしてきました。

腰の痛みなんて久し振りですから長らく忘れていましたが、懐かしさを感じて、私が今此処に確かに生きて存在しているのだと感じます。

「…さて、帰りましょうか」

『It is tired with labor. Meister.（お疲れ様です。マイスター）』

「死ぬかとも思いましたけどね…」

まさか生身で、偽物とはいえ使徒と戦うなんて。しかも力を司る最強の使徒。

外から撃つても仕方がないから零距离で撃ち込みましたが、良くこれだけの軽傷で済んだと、普通なら手足の2、3本失っててもおか

しくない攻防でしたね。

今後を考えると、もつと作戦なり戦術なりを考えていかなければなりませんね。

あのジュエルシードの暴走体でランクA A +

ランクAAAのフェイト・テストロッサと戦うには、今の私では絶望的。

それを覆す戦術を考えていかなければ。

私が高町なのはを証明する為の戦いは、始まったばかりなのですか

II

家に帰った私は、私専用の倉庫兼作業部屋で自転車の整備をしてからお風呂に入って自室で眠りに着きました。

ユーノは今頃母様に揉みくちやにされているでしょう。

ちなみに高町家には私の部屋の窓から直通の小さな小屋が有り、剥き出しの柱と木壁だけの1階部分は物置として使い。2階は私専用の書斎兼絵を描いたり、機械を弄る作業台のある部屋となっていていま

す。置ききれないプラモの大半も向こうです。

作業部屋に籠もると何時間か出て来ないのは当たり前、ユーノの事を訊かれた以外はなにもありませんでしたよ。

翌日。目を覺まして左の頬に触れる。

そこには絆創膏が貼っており、昨日の事が現実であることを実感させてくれます。

「あつ、いたたた」

ついでに腰の痛みや筋肉痛もプラスされます。

[illegible]

「おはようなのは！って、どうしたのよ！？そのほった！」

バスに乗ったところでアリサに声を掛けられました。すると心配そうに私の方に駆け寄ってきました。

「なんでもありませんよ。昨日少し階段から脚を滑らせてしまっています」

「ちょ、それなんともないなんて言わないわよ！病院行つた！？行つてないなら今すぐ行きましょー！」

「アリサ、とりあえず落ち着いて下さい。階段とは言つても5段くらいからだつたので、少し痣になりましたが概ね問題はありませんですよ」

「あーんつもー！！だからなんであんたはそうやって冷静に言うのよ！？痛いなら痛いって言いなさいよ！あんたケガしても、いつもいっつもなんでもありませんしか言わないのよ！」

心配してくれるのは有り難いのですが、一応大人である私には子どもにする怪我の痛みはあんまり痛くないのは事実なんですよ。

それに怪我という怪我は頬だけですから、心配も要りませんよ。

っと、言葉で言つても聞きそうにないだろうアリサの手を引いて、いつもの後ろの席に座ります。

「ちょ、ちよつとなのは……」

「あなたは優しいですね、アリサ」

「あ、当たり前じゃない！な、なのはがケガしたら私だって痛いん

だから……」

頬を赤くして目を潤す仕草は一種の破壊兵器ですね。良心が痛みます。

「おはようございます。すずか」

「お、おは、よう。なのは…ちゃん……」

私が挨拶をすると、すずかは顔を背けながらもチラチラと目を向けては背けをしながら返事を返してくれました。

確かすずかは吸血鬼一族の設定で、以前体育で顔面にボールの直撃を貰い、軽く鼻血を出した時もこんな反応でしたね。

一応頬と右腕は、暴走体の攻撃で出血していましたが、血の残り香に自分と戦っているのでしょうか。

こういう時は触れぬが友の為ですね。

私は良い友人を持ちました。

学校に居る間はユーノから事情を聞く片手間、レイジングハートには機体設定と魔法関連のアジャストを頼んでやって貰いつつ、デバイスのデータをアリスにもリークして貰っています。

これによって使える魔法と、今は不要な魔法や私が使いたい魔法を
チヨイスしてアクショントリガーに登録していきます。

そして放課後、送っていくというアリサの誘いをやりわり断り、帰
路に着きます。

アリサとすずかには塾がありますし、密室に近い自家用車ではすず
かの理性が心配ですし、確か今日も1つジュエルシードが発動する
はずだったような？

第1期はテレビでなく二次創作からの知識が主である為、かなり曖
昧不確かなのが難点なんですよね。

劇場版はちゃんと見ている分心配はありませんが、初っ端からジュ
エルシードの数に違いがありますから、どっちのルートを進むかわ
からないんですよ。

一番手っ取り早いのはバルディッシュの形が判れば一目瞭然なので
すが。

とりあえず今、レイジングハートは色々忙しい為、適当に街の中
心へ向かうことにしましょう。

それならば何処かで発動しても瞬時に駆けつけられますしね。

そして街の中心へ向かいつつ、アリスをどんなデバイスにするのか
を考えます。

インテリジェントデバイスなのは確実です。レイジングハートが劇
場版形態の為、TV形態のレイジングハートを再現してみたい思い
もあります。喧嘩になりそうですね。

他にはバルディッシュのように近接戦闘を主眼に置いたデバイスにするという手もありますが、運動神経のない私に扱えるかが問題ですね。

《それにしても、なのはって何者なの？そのインテリジェントデバイスにしても、こっちは魔法は無いはずなのに》

《何者と言われましも、特別何かをしているわけではありませんよ。それにこの子は私のファミリアですし、魔法という物がなかるうとも、魔法という概念は、御伽噺やゲームの中には存在していますし、まったくゼロというわけでもないと思いますけど？》

なにせ吸血鬼なり御神流なりが存在する世界です。

ここにトラハが本格的に混じっていたらそれこそ、この世界も管理指定を受けるかもしれないでしょうね。

しかし管理とはいえど、その実態はミッドチルダを中心とした中央集権支配体制にも見えなくありませんし、管理局のトップがあるエゴ塗れの脳髓で思考がお花畑な人達では、この世界とは全面戦争にでもなりかねませんね。

ただでさえ、質量兵器に潔癖症をもつミッドチルダの人間では、この地球は危険物の塊でしょうし。

《なのは？》

《……すみません。少し考え事をしていました》

今考えても仕方がないことですネ。

『The completion of adjustment .
The next battle to a motions
hould become light now . (アジャスト完了。これで次の戦闘から、動きが軽くなるはずです)』

「お疲れ様です。レイジングハート」

レイジングハートはこんな私に力を貸してくれるのですから、私はその想いにも応えなければ

その時、強い魔力の波動を感じました。

この波動は

《なのは！》

《ユーノ、今の感覚が》

《うん。ジュエルシールドだ！結構近い！》

《私は先行します。ユーノもなるべく速く来て下さい》

《ダメだよなのは！1人じゃ危険だ！》

《こうしている間にも、暴走体が暴れている可能性もあります。足止めて、被害を食い止めておかなければ……》

《ちょ、なのは！なのはったら！》

私はユーノの言葉を見殺し、駆け出します。

運動神経は皆無でも、走って転ぶような無様は 自分のペースを乱さなければ晒さないようにはなりました。50m13秒台ですが……。

やってきたのは海鳴市で少し高台の方にある神社。名は確か八束神社でしたか？

「いきますよ、レイジングハート」

『Stand by Ready』

我、使命を受けし者成り

契約のもと、その力を解き放て

風は空に 星は天に そして不屈の心はこの胸に

この手に魔導を

「レイジングハート、セットアップ！」

『Stand by Ready・Setup!』

レイジングハートがデバイスモードへ変形し、私の服もバリアジャケットに再構成される。

「レイジングハート！」

『Hover Feather』

背中と足にホバーフェザーが展開。

そのままホバー走行で神社の石段を駆け上がる。

最上段で勢いをそのままに跳び、神社の鳥居の上に飛び乗ります。

そして境内には

「あれは 狐……ですか…?」

『Kuooooo——!!』

遠吠えをする巨大で凶暴そうな狐が私を一直線に見つめています。
どうやらターゲットを私に絞ったわけですね。

「征きましょう。レイジングハート、アリス」

『My master which should go!（行き
ましょう、マイマスター）』

『Please do your best. It is the
Raging Heart to a master.（頑
張って下さい。マイスター、レイジングハート）』

ジュエルシード暴走体：狐型 魔力ランクA+

高町なのは

魔力ランクA 空戦適性C 陸戦適性D+（ホバーフェザー発動中
はA+）総合ランク推定C+（ホバーフェザー発動中はB）

使用可能魔法

シュートバレット

デイバインランサー

デイバインランサー・ファランクスシフト

クロスファイアシュート

クロスファイア・バーストモード

ファントムブレイザー

デイバインバスター（2発限定。3発目は不発の可能性大）

スターライトブレイカー（フルドライブ時条件付きで使用可）

プロテクション
バリアバースト
リングバインド
チェーンバインド
クリスタルケージ
ブリッツアクション
ホバーフェザー
フィジカルヒール

「アジャストのお陰で使える魔法も増えました。昨夜のような無様な遅れはもう取りませんよ！」

第6話 新しい友達は『くおん』です（前書き）

調子良かったので連投です！

第6話 新しい友達は『くおん』です

Side: 高町なのは

レイジングハートを眼下の暴走体へ構える。

『Kuoooooーー!!』

暴走体は口から雷撃を吐き出した。

「レイジングハート!」

『Protection』

右手を突き出し、バリアを張る。

激突するバリアと雷撃。

「っ、きゃうつ!!」

『Master! (マスター!)』

突き出した右手に鋭い痛みとピリピリとした痺れにも似た感覚を感じる。

何故！？防御には成功したはずなのに！

『K u o o o o o n ! ! ! 』

暴走体の周りに展開されるバチバチと電気を発するスフィア。

プラスマランサー？それともスタンバレット？

『K u o o o n ! ! 』

対空するスフィアが放たれる。

直射型のバレット？

「レijingグハート、もう一度！」

『P r o t e c t i o n 』

またバリアで防御。突き出す手も変わりません。

「っ、きゃああー!!」

『Master!?(マスター!?)』

またです。バレット自体は防御出来ているのに、スタン効果だけがバリアをまるで素通りしているように

「まさか!?!」

八束神社、狐、電撃、リリカルなのは

4つのパズルから導き出された答え。こういう時は自分の無駄に回転の良い頭を疎ましく思います。

「最悪です……」

もしアレが私の考えている存在ならば、私は暴走体の攻撃をすべて回避しなければなりません。

「レイジングハート、これから先は防御は考えずに、機動攪乱で攻めますよ」

『I understand. I also judge th

at it is wiser. Please do not
carry out unreasonableness. (わか
りました。その方が賢明だと私も判断します。ですが無理はしない
で下さい)』

「それは向こうが許してくれませんかしょうね」

『Fushuuuu……』

バチバチと帯電する暴走体。体勢を低くしていると、突っ込
んでくる気のようにです。鳥居を壊される前に私は鳥居から跳躍し、
神社の屋根を足場にし、神社の裏手の森の中へ逃げ込みます。

アレを封印するには少々骨が折れそうですね。

『High plasma object! It is rap
id approach from back! (高プラズマ体！
後方より急速接近！)』

「回避後、180度ターンと同時にデバインランサー展開！」

『All right!』

地面を滑りながらスライドマニューバーでプラズマ体を回避。

思った通り、プラズマ体は囷。

『Kuooooo——!!!』

後ろから本体による直接攻撃！

『Devine Lancer』

私の周囲に展開される環状魔法陣に包まれた桜色のスフィア。その数は12。

私は球技も絶望的ですから、誘導系より直射型の方を求め、レイジングハートに組んで貰った新しい魔法。

デバインランサー

「ファイア!!」

12個のスフィアから次々と槍型の魔力弾が発射。配置感覚も考えているため、回避する間すらなく直撃してゆきます。どうやらバリアは張れないようですね。ならばこれで幕引きです！

『Blitz Action・Devine Buster・Stand by Ready!』

短距離限定の超高速移動魔法 ブリッツアクション。

高町なのはのように魔力の無く、バカスカ砲撃を撃てない私には一撃一撃が勝敗の決め手になってしまふ。さらに魔力の所為か、経験の所為か、練度の所為か、砲撃の威力も高町なのはには及んでいないように思えるのです。

そこで編み出したのが、近々中距離での攪乱から一気に懐へ飛び込んでの零距离一撃必殺砲撃。

砲撃魔導師とはかけ離れた戦闘スタイルですが、私はこうしなければともな一撃が入らない。なりふり構ってはいられません！

私の右手の拳の先に展開される、環状魔法陣が取り巻くスフィア。

『K U O O O O O ! ! ! ! !』

デイバインランサーの爆煙から飛び出して来た暴走体は口を開け、私に噛みつくこうとする。

私はブリッツアクションの加速をそのままに身を屈める。

上を過ぎ去る暴走体の口。

懐を捉え、ホバーフェザーの推力を上ベクトルで解放しながらアッパーを叩き込み、予め用意していた魔法を解き放つ！

「ジュエルシード、封印！」

『Sealing.』

光りが晴れ、ジュエルシードと分離された狐。

『receipt number XVI.』

「スウ……ふう……」

深呼吸をして、緊張状態を解きます。

やはり使える魔法が多いのは助かります。

それに昨日に比べて疲労感も大分軽いです。やはり優秀ですね、レイジングハートは。

「……………」

ジュエルシードに取り込まれていた狐を抱き上げてみます。

「……………」

もふ

「…………ふにゃあ…………」

な、なんですかこのふっくらもふもっこりもかまかの癒やし物
体は ！？

「なのは！！」

「ユーノ？」

ユーノが来た様ですね。

「なのは！ジュエルシードは！？」

「しーっ、ですよ。ユーノ」

「……？」

とりあえず狐を抱えて、出来るだけ振動を出さずに裏路地の住宅街
の屋根をブリツツアクションとホバーフェザーを使って駆け抜け、
家に向かいます。

は、早くこのモコモコをゆっくり堪能したい！

side: ユーノ・スクライア

なのはの才能には舌を巻くというか、昨日の今日。まだ24時間経ってもいないのにもうレイジングハートを使いこなして魔法を使うバトルセンスは恐ろしく思う。

でも何よりも恐ろしいのはその戦術展開と思考速度と判断力。

なんかもう、僕も9歳にしたらそれなりに普通の9歳とは違うのは環境上自覚しているけど、なのはのそれはかなりぶっ飛んでいるように思える。

「ふにゃあ……」

なんかトロっとした目のままテレビゲームをしているのは。

その原因はその胸元で寝ている狐。

なのはの話とレイジングハートの戦闘ログから、ジュエルシードに取り込まれた狐らしい。

原因で思ったけど、やっぱりなのはタクティクス能力はこのテレ

ただただ、至福です。

「……クー……ク　！？」

あ、起きたようですね。

キヨロキヨロ見渡している様がまたなんとも……。

至福です。至高です。アリサに匹敵する程の萌えです！

「　！？　クー……！！」

後ろからもさもさの物体を抱き締めます。

……ふにゃあ……。

「クー……！！クー……！！」

「な、なのは、その子嫌がつてない？」

「なにを言いますかユーノ？ただ状況を理解出来ずに混乱しているだけでしょう？もう大丈夫ですからね？怖い物は私が取り扱いますから」

泣き声を上げて狐はもがき続けてる。

ユーノは見えて思った。

狐はなのはを見て余計に泣いているんじゃないかと。

しかしそれは口にしなかった。

もし口にしたら自分もアッパーデイベインバスターからレイジングハートの零距离デイベインバスターの2連多段コンボでノックアウトされると僅かばかりにも想像して身震いがしたからだ。

「クーーーーー!!」

「あっ……」

脱出に成功する狐。一目散に部屋の端に行くが、なのはの部屋は高町なのはの部屋より物が多くてかなり狭い。

狐は本棚の影に隠れるが、なのはの方を見ていた。

目のあったなのはは微笑むと、狐は本棚の影に隠れ、そしてゆっくりと顔を少し出してなのはを見る。

恐いけど気になる。そんな感じに。

「初めまして、私は高町なのはと申します。あなたの名前は？」

「……クー……クオン……」

「そう、久遠　ですか」

「クオツ　！？クー……」

私が久遠と正しく発した言葉にはつきりとビクンつと反応する狐。

状況証拠的にも、この狐は十中八九とら八の久遠なのでしょう。

ですが家には居候人は居ませんし、高機能性遺伝子障害病　通称
HGSでしたか？

それについてもまったく情報はありませんし、いったいどの程度この世界にとら八が混じっているのか皆目見当もつきません。

劇場版かTV版かも知らないのに横腹からとら八まで突っ込まれたら私もどうすればいいかわかりません。

戦闘民族高町家。

もしとら八設定に汚染されていたら兄様と父様には私が夜に出掛ければ間違いなく気づかれるでしょう。

以前から海岸線に夜、泣きに行っていたことがあります、それでも月に一度二度あるかないか、あまり出歩いては心配もされます。

あまり夜は動くべきではないのでしょうかね。

「久遠、こっちに来て下さい」

膝をポンポン叩いて促しますが、久遠は固まったまま動きません。
仕方がありません。

「クオン！？クー、クー」

「…ふにゃあ……」

至福です……。

「クーーーー！！」

「あ、あはは……」

現在封印したジュエルシードは3つ。

お供はユーノと久遠です。

「え？僕オトモ扱い？」

「クウーーーー！！」

「…ふにゃあ……」

第6話 新しい友達は『くおん』です（後書き）

V S 久遠でしたが、この久遠は未だに封印状態にあるため弱いという設定です。

しかも使える魔法の種類が増え、戦術の幅が広がり、ゼルエルを倒した我が家なのはの経験値はデカかったのです。

決して久遠が弱いんじゃなく、なのはがちょっと強くなったのです。

とりあえず久遠をお供にする為に高町式 O H A N A S I で
も

ちなみにとらハキヤラは今のところ久遠だけで限界です。

意見・感想をお待ちしております。

第7話 御神の剣（つるぎ）（前書き）

ちよつと長めです。

第7話 御神の剣(つるぎ)

side:高町なのは

ユーノを迎えたばかり故に、久遠もとなるとさすがに断られそうだと思った私は、家族には内緒で久遠を部屋に置くことにしました。

久遠はまだ少し身持ちが固いですが、それでも餌づけと毎日抱き締めて寝る事で、敵でない事をアピールします。

ジュエルシード、魔法と出逢って5日目。集まったジュエルシードは3つ。

高町なのはと違い、夜は出掛けずというか、出掛けられない理由が複数あり、これ幸いにとちゃんとぐっすり寝るようにしている為、疲労感は無く。レイジングハートも二度の戦闘経験から私の為にアジャストとブラッシュアップを繰り返して仮想戦闘シミュレーションを繰り返してデータを蓄積・更新の繰り返しで、日に日に少しずつですが、動きも良くなってきたように感じます。しかし私の戦闘スタイルは未開発で開拓中のスタイル。

まだ的が大きいジュエルシードの暴走体だから当てられるものの、フェイト・テストロッサにはまだまだ届かないでしょう。

たとえ勝てずとも無様に墜ちるわけにはいかない。これは元男の私自身の男の意地というものです。墜ちるば諸共

そんな心構えで挑むつもりです。

さて、今日も学校ですね。

ユーノを肩に乗せ、久遠を置いて一度部屋を出て一階のリビングへ。

「母様、おはようございます」

「おはようなのは、ユーノくん」

キッチンでは母様が朝食の支度中ですが、他の皆が見当たりませんね。

「父様達は道場の方ですか？」

「そうよ。あ、ちょうどいいからなのは、みんなを呼んできて頂戴」

「わかりました」

玄関よりも近い縁側の方に回ってサンダルを引っ掛け、道場へ向かいます。

《そう言えば、道場って言ってたけど、なのはの家族はなにかやっ
てるの》

ユーノが念話で質問してきます。そういえばちゃんと説明していませんね。

「永全不動八門一派・御神真刀流、小太刀二刀術」

《え、えーっと……》

《御神流は、二振りの小太刀を主軸に、飛針^{とげ} 棒手裏剣のようなものや鋼糸^{こうし}と呼ばれるワイヤーのようなものなどの暗器、さらには体術なども用いた総合殺人術です》

《さ、殺人術って……》

《御神流は御神家という、父様の血統列の家の流派で、表立った要人警護を主とする御神流。そして父様の旧姓の不破家は要人暗殺を主とする御神流・裏を伝えているのです》

《な、なんか、壮大だね……》

《ええ。それで父様は師範代、兄様は師範代理、姉様は兄様から御神流を教わる門下生のようなものです。これが戦闘民族一家高町家の戦力図形態です。陸戦限定なら推定A A AからS +、条件付けでS Sクラスでしょうね。私の私見ですが》

《す、凄いなだね……》

《達人ともなれば、表面を傷つけず衝撃で物の内部だけに破壊を引き起こしたり、模造刀でドラム缶を一刀両断することも可能です。以前兄様のことを見たともあります。スピード重視の剣術であるため、

力の強い者が用いる剛の剣に対しては多少不利な面もありますが、超能力を用いない純粹な人間本来の肉体・能力のみを用いた、『戦士』としての武術の中では屈指の流派でもあるでしょう』

《も、もういいよなのは。早く行こう》

《そうですね》

改めて御神流のことを軽く振り返ってみたこの時、私は思いました。そんな戦闘民族一家高町家の末妹である私にも、その血が流れているお陰で、2体の暴走体との戦いでも大きなケガもなく無事に終えられたのではないかと。

御神流

そのお陰で一度父様は命の危機を迎えました。

そのお陰で少し嫌悪感を持っていましたが、場合によっては兄様が姉様に頼んでみましょう。

近接高機動戦闘型砲撃魔導師

私の戦闘スタイルから造称した砲撃魔導師の新スタイル研究、開拓、開発、探求、確立の為に。

少しでも、戦術の幅を広げる為に

道場へ足を踏み入れると、腕を組んで立っている父様。そして道場の中心で

「せえいっ！」

「ふっ」

二本の小太刀の木刀で打ち合う兄様と姉様の姿。

「父様」

「ん、おはようなのは。そろそろ朝ごはんか？」

「はい。母様が呼んでいます」

「ありがとうな。でももう少し待ってくれ、今良い所なんだよ」

「良いところ？」

小太刀を構え鰐競り合う2人。

私は近くで見ようと父様の近くに寄ろうとしますが

「おっと……なのは、そこから先は来ない方が良いでしょう」

「え…？ツ！？」

ゾクリッ、と。

背筋が冷たくなる感覚。

いきなりの感覚に身体が勝手にバックステップ、感覚を感じた方向に身体が身構える。身構える先には兄様と姉様。まさか

「今の……」

「んー、まあなんだ、殺気というか闘気というか……なのはにはまだ早いかなー？」

「いえ、言葉の意味は解せます父様」

頬と背中を冷や汗が流れ落ちる。

暴走体からは感じませんでしたから、初めての感覚に驚いてはいませんが、死線を潜り抜けた身、恐怖はそこまでは感じませんが、真正面から向けられたらわかりませんね。

高速の領域、私の視界では捉えられない速さの攻防に、改めて高町家の非常識さを実感します。

《すごい……これほどの戦士は僕たちの世界にもそうそう居るものじゃないよ》

《現代にもあまり居ないと思いますよ……》

《あ、なのは、危ない!》

《え? なっ !?》

ユーノとの念話の最中、一本の小太刀が私の方に回転しながら飛んで来ます。

また思考より身体が先に反応する。一瞬で戦闘体勢と思考を切り替えられるようにはなりました。

身を屈めながら腕を引き締め、上を過ぎ行く木刀へ身体全身のバネを使った渾身の一撃で

「デイベインバスター!!」

力チ上げる!!

クリティカルヒット、自分でも納得の行く入りの一撃に、私も少しずつ強くなっていることを実感します。

打ち上げられた木刀はそのまま天井に突き刺さると、床に落ちました。カランカランという音が道場に響き、ドンツという私の着地音が続けて響きます。

自分の右手を感覚を確かめるように握って開いて、そこで思考が切り替わり、気づきました。

や、やってしまいました……。

や、厨二病と言えば誤魔化せるでしょう。

「いやあ……凄いななのは、何時の間にそんなこと出来るようになったんだ？」

父様が和やかな声で言いながら、私に歩み寄って頭を撫でてくれました。

幾つになっても、頭を撫でられるのは良いものですね。

「ごめんねなのは、びっくりさせちゃって」

「いえ、偶然ですからお気になさらずに、姉様」

「驚かせてすまなかったな。それと、あの一撃は中々の切れだったぞ」

「恐縮です」

そう言って頭を撫でてくれる兄様。

言葉は少ないですが、こうして態度でそれを補ってあまりあるのが兄様。

その辺りが大変好ましく、尊敬しています。

「恭也には、俺からいう事はもうあまりないな。俺より強いんじゃないか？」

「まさか……まだ敵わないよ」

兄様でも敵わない父様はどれだけ強いのでしょうか？

それにしても、兄様もやはりとら八方面色が強いように感じます。何より踏み込みの時に一瞬脚を庇うように見えました。

おそらく私の知らない所で膝を壊している可能性もあります。

もう、劇場版とかTV版以前に、どこからリリカルなのか、どこまでとら八なのかまったくわかりません。

そのうちHGSとか出て来たりするんじゃないんですか？

そうになったらもはやカオスです。

「どうだ、なのはも御神流やってみないか？」

父様が私にそう言います。これは渡りに船ですが、ジュエルシードを探す時間の兼ね合いもありますし。

「…軽く、朝の稽古をつけてくれますか？」

「ああ、良いとも！」

私の言葉に父様は微笑みながら頭をガシガシと撫でてきました。

兄様より大きくてゴツゴツしている手。

私はこの手が大好きです。

「あゝあ、とうとうなのはも御神流を習うのかあ……なんか理不尽」

「俺は8歳から御神流をやっていたから、丁度良いと思うが」

「だってあの運動音痴のなのはが、あんなアッパー決めちゃったんだよ！？私なんか直ぐ追い越されそう……」

「良かったじゃないか、その分、身につく速さが上がるんじゃないか？」

「わ〜んなのは〜！！恭ちゃんがイジめるう〜！！」

いや、今はなのは拾ってきたフェレットと狐が居るか……。

その事で少し気になることもあるのだが……聞いて答えてくれるわけでもないだろう。あの子は必要無いことは言わない子だからな。それに今言えずとも何時か話してはくれるだろう。さて、暇だからな、ここは一つ……。

「久しぶりに手入れでもするか」

剪定道具を取り出し、庭の盆栽へと向かう。

パチン

意図せぬ方向に伸びた枝を切り落とす。

美由希や忍には年寄り臭いと言われるこの趣味だが……美由希は園芸、忍なら機械いじりといった事をしているんだし俺の場合、偶々対象が盆栽だったただけだ。

何よりこうしているとどこか心が落ち着くし、考え事をする時にもなかなか良い。

「あの日、からだよな」

5日前の夜、なのはの拾ってきたフェレット。

作業部屋に紛れ込んで、中身を引っ掻き回され怪我をしたとなのは言っていたが、頬からの他に右腕の方からも微かに血の臭いがした。

そしてその翌日の夜には微かに焦げ臭い、あれは人肌の焼けた臭いだった。

機械いじりで火傷したと言っていたが、その日から家に狐の気配も増えた。

フェレットに狐となのはの怪我。何か関係でもあるのか？

それに朝、道場で俺と美由希の気迫を感じて見せた行動と、俺が弾いた美由希の木刀を力チ上げたアッパーに着地の体勢。

俺が言うのもなんだが、高町家の中で一番平々凡々に育ってきたなのは、何時の間にか荒削りだが戦闘経験者のような動きと気配を發した事。

何かあったのか、やはり気にし心配にもなる。

父さんもそれを気づいてなのはに、本人がどこかしら嫌悪感を抱いていた御神流を勧めたのかも知れない。

父さんが怪我をしたのはなのはが今の性格になってからの事だ。あの子は鋭い子だ。

御神流と 正確にはSPの仕事と父さんの怪我の関連に気づいていたのかも知れない。

それに俺の焦りとプレッシャーも。

その所為で、俺は一度妹の心を潰しかけてしまった。

俺達家族の罪。

だから父さんも怪我を期に仕事を辞めた。

俺も焦りとプレッシャーから来た無茶からの怪我を経て、御神流を、ただ父さんのように強くあるのでなく、大切な物を守る為に振るう事にした。

怪我が治りきらない俺には御神流剣士としての完成は絶望的だが、それは時間をかけて美由希がやってくれるだろう。

剪定のハサミ、その刃を小太刀の刃に重ねる。

「恭也、お前に守りたいものはあるか？」

昔々、そこまで昔じゃないが、父さんに言われた言葉。

その時の俺はまだガキだったからどうにも答えられなかったが、あの日、なのはが泣き腫らした顔をしてスケッチブックを大事に胸に抱いて、怯えながら帰ってきた末妹の姿を見た日から今日まで、そしてこれから先もずっと胸を張って、俺は父さんに言える。

俺が振るう御神流は、大切な物を守る為にあると。

契約のもと、その力を解き放て

風は空に 星は天に そして不屈の心はこの胸に

この手に魔導を

「レイジングハート、セットアップ!」

『Stand by Ready・Setup!』

レイジングハートとバリアジャケットを展開し、久遠を一度抱き締めてから、ユーノを肩に乗せて窓から外へ。

「レイジングハート」

『Hover Feather』

ホバーフェザーを展開し、暗闇の住宅街を駆け抜ける。

「レイジングハート、速度を上げて下さい」

『All right・Blitz Action!』

ブリッツアクションも使い、さらに速度を上げて八束神社へ。

八束神社へ辿り着いた私はホバーフェザーを消し、境内を見渡します。

「境内には……無いようですね。もしかしたら裏の森でしょうか？」

「そうかもしれないね。行ってみよう？」

「ええ」

神社の裏側の森の中、とりあえず投影モニターに移した久遠との戦闘ログを振り返りつつ、久遠との戦闘場所にはサーチャーを、私達はその反対側へ向かいます。

ユーノの結界も張らず、剥き出しの空間でディバインランサーやディバインバスターを放ったのですから、その魔力余波に反応せず動しなかったジュエルシード。

それが意味するのは、魔力波が届かない場所にあったか、あとから持ち込まれたか

魔力流を打ち込んで強制発動とかの方が速いんでしょうが、フェイト・テストロッサのような無茶を出来ない私はそれも出来ない。サーチャーへの魔力も戦闘を想定するとそこまで数もまわせませんし、地道に探すしかありません。

「とは言え……少し視界が悪いですね」

森は薄暗く、闇夜に慣れてもやはり視界が悪いです。

夜空を仰ぎ見る。

漆黒の闇夜に浮かぶ満天の星光。

その中に浮かぶ月。

その月明かりのお陰である程度の光量がありますが、森を照らすには足りません。

「確かに、こつも暗いとね。僕が照明魔法を使うからちょっと待ってて」

ミッド式魔法陣がユーノの前に展開し、スフィアを形成。

これが証明魔法ですか。魔力光に関係なく普通の証明の照らすスフィア。

「これで少しは探しやすくなったかな？」

「ええ。では再開しましょう」

|| || || || || || || || || || || || || || || ||

side：高町恭也

後を尾けてるつもりだったが……実際の俺は家で寝ていて夢でも見ているんじゃないだろうか？
思わずそう考えずにはいられない。

まず、ユーノが喋った。そして魔法とやらを使った。

なのはの前方には火の玉のようなものが浮いている。

だが、これは夢ではなく、現実。

比較的俺が落ち着いているのは……変異性遺伝子障害と言う病気の副作用で黒い翼を持った幼馴染、そして夜の一族といったものを既に知っているから。

「超能力、吸血鬼、自動人形と来て……魔法……か」

しかもそれをなのはも使っている。

神速にも似た移動法を使っていれば、飛んでくる木刀位は迎撃は出来るか。

しかしこれで大体は読めてきた。

なのはは、妹は、かつての俺のように幼いながら、もう戦う戦士であるのだと。

ある程度納得できたが……何故こんな所に？

その時、ふと頭上で何かが羽ばたいたような音。

こんな時間にか……？この林でも、今まで鍛錬は幾度となく行なっているが、梟など夜行性の鳥類はいなかったはずだが。

||||||||||||||||||||

side…高町なのは

「……っ」

「なのは、これは……」

「ええ、ジュエルシードの気配……上！」

『G u a a a a a —————！！』

「ッ！プロテクションー！！」

『Protection.』

「くっ」

右手を突き出し、バリアで羽を受ける。

ボンッ！ボボボンッ！！

「きゃあっ！」

「炸裂弾！？なのは大丈夫？」

「ええ…」

炸裂の余波は貰いましたが、怪我はありません。

「レイジングハート、デイベインランサー展開！」

『All right! Divine Lancer・Stand by Ready!』

「ファイア！！」

6つのスフィアからデイベインランサーを連射。しかし暴走体は空へ飛び上がり、デイベインランサーを回避する。

「このっ」

『G u a a a ー!!!』

「ファイア!!」

私と暴走体の間で、ディバインランサーと炸裂羽の弾幕が激突する。結果が張つてある分、派手に手加減無しにやれます。私のスペックも120%で運用可能です！

『G u a a a ー!!』

炸裂羽が無駄と見てか、暴走体は翼を羽撃かせ強烈な風を起こす。

「くっ、なんて風！きゃあああっ」

「な、なのは!!」

バリアジャケットや頬や手が裂け、全身に痛みが走り血が噴き出す。まさか

「かまいたち!!」

「風の刃 ！？」

フィールド攻撃系ともなれば防御は抜かれますね。

「レイジングハート！」

『Mode change! Cannon mode! Blitz Action. and Hover Feather Stand by Ready!』

「ハアアアアー！！！」

ホバーフェザーとブリッツアクションの高起動による攪乱。

「デイベインランサー！」

『Divine Lancer! Stand by Ready!』

「シュートオオツ！！！」

10個のスフィアから次々にデイベインランサーが放たれる。対フ
ェイト用に考案していた戦法ですが、ここで試すのも良いでしょう！

デイベインランサーのランダム射撃により空中機動を限定し

『Guaaaaaa!!!!』

敵の回避予想地点を割り出し、そこへ

『Gua!?!』

「デイベインバスター!!」

地上からホバーフェザーの推力を全力解放!

暴走体の懷にドンピシャで突貫し、アッパーと同時に零距离でデイベインバスターを撃ち込む!

そして

「ジュエルシード、封印!」

『Sealing!』

構えたレイジングハートのカノンモードの砲口を突きつける。

『Devine Buster!』

『Protection.』

「くっ、ああああーっ!!」

バリア事押し、そのまま木に追突する。

「がはっ!!」

「なのは!!」

『Gyuaaaaaa!!!!』

暴走体が口を開け、私に迫る。

バリアも回避も間に合わない!

「くっ!」

「なのは――!!」

バリアジャケットの防御力を信じて、腕をクロスさせて頭を守る。

ですが、予想した衝撃も、痛みも、やって来ませんでした……。

もう一度、砲撃を喰らわせた場所にレイジングハートを突きつける！

「リミット解除！レイジングハート！フルドライブ！！」

『All right！ limit release・Full Drive！！』

フルドライブにカノンモードのフレームに展開される一対の桜色の翼。

環状魔法陣がフレーム、トリガーユニット、柄に次々と展開する。

残った魔力と周囲に散らばった魔力を有りつ丈集める！

「デivainバスター！！マキシマム・シュートオオオッ！！！！」

トリガーを引き、3発目の零距离デivainバスターが解き放たれる！

「ブレイクッ！シューーートッ！！」

『GuGyaaaaa！！！！！！』

今度、こそ!!

「ジュエルシード! 封印っ!!」

『Sealing!』

デバインバスターの奔流が終わり、残ったのはジュエルシード2
個と黒い鳥……おそらく鴉。そして兄様の鋼糸。

『Receipt number XIII・XVII』

「っ、ぜい……はあ……はあ……はあ……がはっ!」

「なのはっ!!」

駆け寄ってくる兄様。

また、無茶をしてしまいましたね……。

「なのは! なのは! なのは!」

「……だい、じょうぶ、ですよ。少し、やす……めば……」

兄様に魔法がバレた。

おそらくはユーノが魔法関係者で何らかの理由でなのはがそれに荷担したんだろう。

しかしユーノの様子をみれば、なのはが進んで協力しているんだろう。この子はそういう子だ。

「兄様……ユーノを、責めないで下さい」

「なのは……！」

「私が勝手に、首を突っ……込んで……いるの、ですか、ら……」

まだ呼吸が落ち着かないんだろうなのはだが、その顔はやり切った良い顔つきだった。

これは、責めたら俺が悪者だな。

「わかった。とりあえず、家に帰るぞ」

「はい……」

「ユーノも……な」

「僕は……」

なのはを背負って、俯くユーノの首根っこを掴むと、頭に乗せる。

「きよ、恭也さん……」

「話しはあとでゆっくりと聞かさ」

久しぶりに背負ったなのはの重みに、懐かしくも、最後に背負った5年前より重くなった妹に、何時の間にかこんなに遅しく育ってしまったことを少し嬉しく思った。

とりあえず美由希。お前本気でこのままだとあっという間になのはに抜かれるかもしれないぞ。

第7話 御神の剣（つるぎ）（後書き）

兄様に魔法がバレました。

とら八恭也スベックならこれくらいは大丈夫だろうか？

意見・感想、お待ちしております。

第8話 切なる言葉

side：高町なのは

私は兄様に背負われて家に戻ったあと、作業部屋にて兄様に現在海鳴市で起きていることとジュエルシードについてを説明しました。

ケガはユーノと私でフィジカルヒールをかけたので問題はありません。

「そうだったのか、だがユーノ、お前の責任感は立派だが、何故自分1人で来たんだ？事情を話せば仲間の1人や2人は着いて来てくれたんじゃないか？1人で飛び出して、ケガをして、今は結局はなのはに頼りきりの状態だ。仲間を呼べないにしても事前に色々と必要な物や事柄をすべて終えてから来るべきだったんじゃないか？」

「うっ、す、すみません……」

その辺りは大人びて見えるユーノでも9歳故の脆さと迂闊さでしよう。

焦って準備を怠り、さらに攻撃力は私にも劣っているユーノでは、たとえレイジングハートを持っていても、それは蛮勇であり無謀ともいう行動でしょう。

まあ、そうなる運命であると言われてしまえば、私もユーノもそれ

までなのですが

「それになのはもだ。こんなに危険で一大事の事を何故1人で抱えようとしたんだ？」

「そ、それは……」

説明する為にレイジングハートに頼んで今までの戦闘ログを兄様に見せたのは失敗だったかもしれない。いずれも軽傷とはいえ無傷ではなかった戦い。

それ故に兄様の眼光はユーノに向いていたそれよりも厳しく感じます。

「まあ、大きなケガもなく済んでいたから良かったものの、今日俺が居なかったらどうなったか、それは一番なのは自身が良くわかってるだろう」

「はい……」

あの時兄様が居なかったら、きっと私は

「魔法という時点で、確かに他人に話すには眉唾ものと取られるだろうが、俺達は家族だろ？」

「っ!」

「もう少し、俺達の事を頼ってくれたって良いんだぞ?なのは」

兄様の言葉は嬉しく心を満たし、そして残酷に私の心を抉る。

本物の高町なのではない、異物な存在である私を家族と言われる嬉しさと、高町なのはへの罪悪感が私を蝕む。

「とりあえず、なのはが話すまで俺は黙っておくから、ちゃんと話せるようになったら話すんだぞ?」

「はい…」

家族。甘美な言葉は私に温もりと痛みを与える。

高町なのではない、異物の私には享受する権利の無い言葉だ。私が高町なのはある事を証明するまでは

「クウ……」

「大丈夫ですよ、久遠」

心配そうに私を見る久遠に顔を埋める。

まだ4日でも、久遠は私の事を好いてくれているのを感じます。

この世界がどの程度とら八に浸食されているか判りませんが、場合によっては久遠から祟りを打ち払うのを私がやらなければならないかもしれない可能性もあります。

ある意味、私は久遠とアリスに依存しています。それは魔法少女リカルなのはにおいて、久遠もアリスも存在しない存在だからです。久遠はとら八キャラではありませんが、それでもリリカルなのは色の強いこの世界で運命でなく偶然が紡いだ、『私』の絆だから。

アリスは言わずもがな、私が産み出した私だけのファミリア。

高町なのはではなく、私自身が私の力で紡いだ絆だから、必要ない壁も作らずに懷を許してしまえるのです。

兄様が出て行った作業部屋で、私はスケッチブックにペンを走らせる。

魔法と出逢って、止まっていた作業が少し進ませる事が出来ました。

何時か久遠と戦わなければならない可能性もあるかもしれない現状、ミッド式魔法だけでは、私は久遠に敗北するしかありません。

ミッド式もベルカ式も、理数系科学によって行使される事象。私基準で言えば科学式で魔法を再現しているだけの物。

純粋な妖狐である久遠相手には、防御しても久遠自身の妖力や霊力効果を防ぐ事が出来ない。

私が久遠と戦った時に電撃だけ通ったのがその証拠です。

レイジングハートの協力で、この世界にもエーテルがちゃんと存在している事が判りました。

あとはそれを使うだけの式が出来れば、魔導師殺しやAMF環境下でも普通に戦闘が可能でしょう。あとは私にどこまでプラーナが存在するのか、そこは戦闘民族一家高町家が末妹の身体スペック次第ですね。

翌日。

私は何時もより少し早起きをして、部屋の中でいつもの筋トレを始めます。

逆立ちして腕立て、腹筋、背筋、そして久遠を頭に乘せてのスクワット。

それが終わった後は軽く汗を流して、道場の方に向かいます。

道場には既に兄様が素振りをしていました。

「おはようございます。兄様」

「おはようなのは。昨日はぐっすり寝られたか？」

「はい。お陰様で」

挨拶を交わし終えたところで、私は以前から気になっていた模造武器を見てまわる事にしました。

野太刀から小太刀、手裏剣や鋼糸、さらには槍からトンファーまで、さすがにハンマー系はありませんでしたが、それ以外の武具なら大抵はある様ですね。さすが総合殺人術御神流。小太刀が主軸でも場合によっては小太刀を振るえない状況も考慮されてもいるのでしょう。

私は薙刀とトンファーを取り出して手に握ってみます。

薙刀や槍はレイジングハートを振るう面では使える技術ですね。

薙刀を戻し、一本のトンファーを左手に持つ。

将来はコレに似た武器も扱うようになるかもしれません。

高町なのはが御神流を習っていたら、魔王でなく冥王と呼ばれていただでしょうね。

その後、兄様と姉様はまた互いに打ち合い稽古。

私は父様から御神流とはなにか？についてのレクチャーを受けました。

内容は私の知る物とあまり違いはないのですが、ただ知っているのと、実際に耳に聞くのは重みが違います。将来のこともある為、私は御神流剣士になることは難しいでしょうが、勧めてくれた父様の

想いに応える為、私も本気で御神流に取り組む所存です。

レクチャーを終えた私は、まずは小太刀の握り方を学び、基本的な振るう型を教わります。

その型を御神流の初歩、御神流 斬と呼ぶ様です。

御神流のあらましは知ってはいましたが、細かな技はそこまで知らず、知っているのは神速くらいでしたから、新鮮な気分です。

土曜日である事も手伝い、今日は一日中御神流 斬の型の練習に注ぎ込みました。

[illegible]

Side: 高町恭也

今日からなのはも御神流を習い始めた。

最初は初歩の御神流 斬から。

しかし既に3回とは言えど内容の濃すぎる戦いと、何よりユーノによれば、なのはは足を止めて遠距離から砲撃を撃ち込む砲撃魔導師というカテゴリーの魔法使いだそうだが、実際のなのはの戦い方はその真逆の近接戦闘で零距离から大火力を直接撃ち込む戦闘スタイルを取っている故か、午後の稽古ではぎこちなくとも既に御神流

斬を振るっていた。

打ち合いになればまだまだ未熟だが、これで神速を覚え、さらに魔法まで使われたらどうなるのか、少し楽しみだ。

父さんも久しぶりに人に教えている所為か、生き生きしているしな。

I

S i d e : 高町なのは

「ふう……」

お風呂に入って今日1日の疲れを癒やします。

4年間、筋トレを欠かさなかったお陰でしょうか、今のところ筋肉痛とかはありません。持久力もなんとか保つようです。なにより楽しい。

強くなれること、地力の違う私は、努力をしなければ高町なのにもフエイト・テストロッサにも劣る存在。

未だに擬似的な三次元機動が限界の私では、空戦中心の無印やA-
Sを生き残るのは並大抵の努力や自力の努力では越えられない壁が
幾つもあります。

それを越える為の力が御神流。

大切なものを守る剣、御神流。

その志しからとは離れたところに使おうとする私には御神流を振るう資格などないのでしょうが、せめて今年だけは許して欲しい。

今年が終われば、無印やA・Sも終わる。

だから今だけは

「なのは〜！一緒に入ってもいいか？」

父様の声で現実呼び戻されます。

「ええ、構いませんよ」

「それじゃあ失礼するよ〜」

腰にタオルを巻いて風呂場に入って来た父様の身体は、私以上にハッキリと判る傷痕だらけです。

「なのはと風呂に入るのは久しぶりだなあ」

「そうでしたね」

私の記憶では、最後に入ったのはこの私になる前の私の臃気な記憶の中で。

つまりは5年振りくらいでしょうか？

「それにしても、なのはは呑み込みが速いなあ。なのはには剣士の才能があるのかもしれないぞ？」

「剣士……ですか…？」

私が思うに剣士と言うよりも近接戦闘スタイルでしょうね、砲撃魔導師であるのに近接戦闘スタイルを主軸とする矛盾を孕むコブセント。

しかしその矛盾した戦法で、私は3度勝ちを取りにいきました。そして3度勝てた。

高町なのはでありながら高町なのはでない矛盾した異物の私が使う矛盾した戦闘スタイル。

ですが私にはこのスタイルでなければ勝つことすら出来ない劣化物。情けないことこの上ない。

「なのは、何か悩みでもあるんじゃないか？」

頭を洗ってもらいながら、父様に訊かれました。父様にはわかってしまっただけですね。

「ええ。悩み事があります。ですがこれは、私にしか……私自身が解決しなければならぬ事故、父様にも話せません」

「そっか。なのはも、大人になって来たんだな」

大人……ですか。

果たして、そうでしょうか……。

私が大人であれば、兄様や父様に助力や助言を申し上げるべきでしょう。

ですが、それは出来ません。

ジュエルシード事件は、私の力で解決していかなくては。

私が高町なのはになる為にも

こんな子どものような意地を貫こうとしている私は、大人ではありませんよ。

第8話 切なる言葉（後書き）

一応ちよつとしたお説教で今回は終えて、兄様や父様からお言葉を

家族

我が家なのはにとつてはとても大切で、本家なのは次に心の悩みです。

私も戦鬪民族一家高町家に居候してみたい……。

第9話 さすらいのバウンティ・ハンター ナノハ・タカマチ ！？（前書き）

軽く誤字を修正。

第9話 さすらいのバウンティ・ハンター ナノハ・タカマチ ！？

side：高町なのは

日曜日になりました。

今日は父様は、自らオーナー兼コーチを務める翠屋JFCの試合の日故に、私の稽古はお休みです。変わりに道場の隅で御神流 斬の練習と魔力を使った新たな技法の編み出しと、身体を流れる生命エネルギー、プラーナを引き出せないかを試行錯誤していました。

エーテルが存在するならばプラーナも存在するはず。

プラーナが引き出せなければ、せつかくの魔装機神体系の魔法造称『ラギアス式』魔法の研究が無駄になります。

ラギアスはラ・ギアスから取っているのは一目瞭然でしょう。

このラギアス式はミッド式を流用し、空間に存在するエーテルに対し、プラーナで介入し、魔術式で効果を引き出す物。

ミッド式から術式を流用している為、ミッド式やベルカ式の防御魔法で防御出来ますが、最大の違いは対AMF環境下でも運用に支障がないところでしょう。

なにせAMFは魔力結合を阻害する物であり、ミッド式やベルカ式に使われている魔力素はエーテルと別物の上にトリガーは生命エネルギーのプラーナ。AMF効果の対象外ですから。

ただ、プラーナがなければ魔装機を動かせないのと同じで、プラーナがなければラギアス式も無意味ということでしょう。プラーナを使う関係上、レイジングハートのようにデバイスがオートで魔法を使うということも出来ません。使える者と使えない者が分かれてしまうのは、ミッド式やベル力式と変わりはありません。

自主稽古を終えたあとは、姉様と汗を流してから出掛ける用意をします。

服装は黒のインナーに黒の長袖シャツ、下は黒色のスラックス、黒のオーバーコート、赤のマフラー、黒のテンガロンハット

どこぞのエンドレス・フロンティアのさすらいのバウンティハンターみたいな格好が私の外出着です。

ちなみにテンガロンハットこそこのなのはの身体になってから被り始めましたが、それ以外は転生前も着ていた服装故に、これが私の私服と胸を張って言えます。

ちなみにバリアジャケット設定時も今のとコレでかなり悩みました。

閑話休題。

「おはようなのはちゃん！」

「おはようなのは！って、またアンタそんな服装を……」

「グッドモーニング、キューティープリンセス。良き朝ですね」

ちなみにこの身体になってテングロンハットを被ってから、ハーケン言葉を使ってみてたりします。

だってカッコイいんですもん。それにこの良き容姿だから許される厨二病キャラ作りとか、やらなくては損ですよ？

「アンタ、少しくらい女の子らしいオシャレとかしようとは思わないの？」

「私はカッコイいから良いと思うんだけどなー」

「すずか！良いの！？このままなのはが男の子になっちゃっても！」

「そ、それは………良い…かな？」

「なんで顔朱くすんのよ！！……ま、まあ、それはそれであたしも………」

すずか、何を想像して顔を朱くしているのですか？

それとアリサ、怒って朱いのかすすかと同じ意味で朱いのかわかりません。

「OK、フェイスレッドガールズ。そろそろ行かないと試合に遅れますよ？」

「わ、わかってるわよ！行くわよなのは！すずか！」

「うん。行こっかなのはちゃん。アリサちゃん」

「OK、行きましょう」

私を真ん中にして、左右にアリサとすずかが並んで歩いて行きます。

ちなみに2人とも手荷物有りですが、私は手荷物無し。しかしコートでわかりませんが、後ろ腰に小太刀の木刀が挿してあります。護身用です。

あと半分趣味で造った炸裂火薬打ち出し電動式超合金エアガン『ナイトファウル』と火薬加速式超合金エアガン『ロングトウム・スペシャル』を一丁ずつ。威力は人体に撃つと結構痛いですが、少し赤くなるくらいしかありません。まあ、眼に当てると怖いですが。

軽く銃刀法違反してますね。まあ、バレなければ良いでしょう。

河川敷にあるサッカーコートまでくれば、サッカーユニフォームを着た男の子達が軽くアップを始めていました。

5月は時々軽く寒かったりしますから、少し羨ましいですね。私は低体温で寒いので嫌いですから。厚着しても寒いんですね。

「なのは、アンタ大丈夫？」

「さ、寒いのかな？なのはちゃん？」

「ズズ……大丈夫です。ちょっと寒いですが……」

ひよう……と、河川敷特有の冷たい風が頬を撫でゆく。

「クシユッ」

「ちょ、なのは！？」

「か、カゼひいてないよね？なのはちゃん！？」

「大丈夫です。ご心配なく」

しかしクソ寒いですね、5月の河川敷。

「少し身体を温めて来ますね」

「え、ちょ、なのは？」

「な、なのはちゃん？どこ行くの？」

「直ぐそこですよ」

土手を降りて父様の隣りへ行きます。

「父様、おはようございます」

「お？来たかなのは。アリサちゃんとすずかちゃんも一緒か？」

「ええ。土手の方に」

危なっかしく土手をゆっくりと降りてくるアリサとすずかを一度振り返ってから父様に向き直ります。

「少し端で身体を温めてきます」

「ん？ああ、気をつけてな」

「わかりました」

てくてくと歩いて、コート of 端側、子ども達の少ない方へ行きます。

しかもなんかちょうど良い高さの切り株も発見。ふむ、やってみましようか。

まずは後ろ腰から木刀を抜き、抜きと入りと突きから御神流 斬へ繫げます。

切り株には僅かに線が入る。

それを5回繰り返してから、木刀を戻してナイトファウルを右手に持ちます。私は左利きですが、転生前は右利き故、実質両利きです。

「OK、シヨウタイムです」

切り株に向き、帽子を押さえて宣言します。

「リッパ―！ハチの巣です。OK、ラストです！グッドナイッツ！
」

リッパ―の斬撃に射撃を織り交ぜて、最後にステーキを撃ち込むデ
キサス・ホールデム。

まあ、弾はBB弾ですし電動マシンガンですからそこまで威力は無く、弾は弾かれます。しかしリッパ―とステーキは頑丈、ステーキは炸裂火薬で実際に撃ち出している為、切り株には斬痕と穴が残ります。

暇にかまかけて習得したハーケン・ブローニングの技の数々。まあ、忘年会新年会隠し芸大会ネタに覚えてみたものですが、完成度は私が納得するまで練習した所為か、完璧です。

「ハイロー・ドロー！私の曲撃ちと早撃ち、たっぷりご覧あれ」

ナイトファウルを真上に投げ、ロングトウムで撃ちつつ落ちてきたリッパーが回転しながら切り株に斬痕を残す。

ロングトウムの弾を変えながらナイトファウルを回収。

「フル・ハウス！撃ちます！斬ります！ここが勝負どころです！私の捌きもなかなかでしょう？」

ナイトファウルを片手で器用に回転させ、リッパー攻撃とマシンガン攻撃の乱舞をお見舞いする。

「7連ステークです！せい！や！7発目！！」

ナイトファウルのステークを1発上向きに撃ち、そこから身体を回転させて2発連続で上向きに撃ち、水平に1発、切り株に背を向けて脇の下からナイトファウルを出して1発撃ち、身体を向き直らせてラストの一撃。

「これでショウダウンです。私に惚れないで下さいね？」

決めセリフを言いながら帽子の鰐を拳銃に見立てた左手の人差し指を下から押すように添える。

フツ、完璧に決まりましたね。

気分も体温も良い具合に高揚しています。

ちなみにファイヤー・マウスとベスト・フラッシュ 2nd、ファントム・ホールデム以外は出来ます。しかしこの服装時限定で、ハーケンになりきらないと出来ないんですけど。なりきりダンジョン？

パシンツ！！

「痛いですよ、アリサ」

何故かハリセンを持って顔を朱くしているアリサ。

「あ、アンタ！それ本物じゃないでしょうね！？てか、私に惚れないでってなんなのよ！？なにがしたいのよ！？曲芸師にでもなりたいの！？てゆーかおもいつきし目立ってるわよ！！」

「なのはちゃん、カッコイイ……」

ツッコミ乙ですアリサ、アナタなら八神はやてと全国行けますよ。

そしてさすが、練習すればあなたにも出来ますよ？

「ほんと！？教えてなのはちゃん！」

「やめい!!」

すずかは雰囲気的に、てか名前に錫華姫でも

「OK、エブリワン。とりあえず静観静聴に感謝します」

帽子に手を乗せながら会釈。

ハーケンはカッコ良くキザにキメるんですよ。

まあ、試合前の余興としては重畳でしょう。

「（凄いななのは、あんな曲芸染みた技、どこで覚えて来たんだ？）

」

「（なのも別ベクトルで軽く非常識だと僕は思っただけだなあ…
…）」

なのはの曲芸撃ちにそんな感想を抱く父とフェレット少年だった。

「……………」

試合は終わって昼食は祝杯も兼ねて喫茶翠屋で。

私もアリサとすずかと一緒に、翠屋の屋外テーブルで茶会を楽しんでいました。

「試合凄かったね。すずか」

「うん。私、胸がときどきしちゃったよ」

未だに興奮冴えやまない2人を見つつ、私はナイトファウルとロングトウム・スペシャルの手入れをしつつ、コーヒーを口に含みます。味は砂糖ゼロで牛乳4割の高町なのはスペシャル。一杯100円也

「でもなのはちゃんの曲芸もカッコ良かったよ!」

「アンタあんなのどこで覚えてくんのよ……?」

「禁則事項です」

人差し指を唇にあてがいながらウィンクで返答します。さすらいのバウンティハンターは多くを語らないのですよ。

「アリサちゃん、すずかちゃん。今日は応援に来てくれてありがとう。楽しんでくれたかな？」

店から父様が出て来ました。サッカーチームは解散したようですね。

今は喫茶翠屋の店長の時間の為、父様はエプロン姿です。

さっきまでは翠屋JFCのコーチだった為にジャージ姿。家に帰れば兄様や姉様の鍛錬の為胴着。何も用事が無いときは私服と。

家で一番衣服がコロコロ変わる人物でしょう、父様は。

そして意外にも変わらないのは母様でしょうか？専業主婦だからでしょうか……。

「今日はお誘いしてくれて、とても楽しかったです」

「試合、とってもカッコ良かったです。なのはちゃんも」

「パパもびつくりだよ。いつの間につてね」

「子どもは陰日向で日々成長するものですよ、父様」

「はは、違いない」

父様の笑い声を聞きながら、残ったコーヒーを飲み干します。

何故かやはりこの格好になると味覚が大人に戻るんですね。

憑かれている？呪いの品ですか？

たかまちなのははのろわれた。

なんてテロップとか出ませんよね？

「それでは私達は今日はこの辺でお暇します」

「おや、お出掛けかい？」

「はい。お姉ちゃんとお出掛けに」

「私はお父さんとショッピングです」

「そうだったのですか、近くまで送りましょうか？」

「ううん。迎えに来て貰うから」

「あたしもよ」

「そうですね、明日お話を聞かせて下さいね」

「うん！」

「いいわよ」

そして私達も解散しました。

「なのはは、これからどうするんだ？」

「そうですね。せつかくの日曜日ですし、久しぶりにウィンドウショッピングに行ってきます」

行き先は家電量販店やジャンク用品店が中心ですが。

「そっか、気をつけて行ってらっしゃい」

「はい。では行ってきます」

ユーノを肩に乗せて私も街へ向かいます。

「ユーノ、一度家に行って久遠を連れて来て下さい」

《え？別にいいけど、久遠を迎えに行ってからでも》

「意外と重いんですよ、この格好」

《あー、うん。わかったよ》

肩から離れるユーノを見えなくなるまで見送ります。

「さて、家電、パーツ、材料が私を待っています」

私は胸を踊らせつつ、しかしクールに歩を進ませ始めました。

しかし、後の私はこの時の選択を、一生涯並みに後悔するのです

第9話 さすらいのバウンティ・ハンター ナノハ・タカマチ ！？（後書き）

ほとんど暴走ネタです。

嵐の前のオチャラケとも言いますが

整った容姿だからこそ許されることもありますよね？

ハーケンと零児のやりとりが好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4448z/>

星光の魔王-シュテル・ザ・エルケーニヒ-

2011年12月20日15時48分発行